

道元を書き直す

著者	William M.BODIFORD, 金子 奈央(訳)
著者別名	William M.BODIFORD, KANEKO Nao (Japanese Translation)
雑誌名	国際禅研究
号	4
ページ	303-384
発行年	2019-12
URL	http://doi.org/10.34428/00012066

道元を書き直す*

ウィリアム M. ボディフォード**著

金子 奈央***訳

道元（1200-1253）は、ことのほか多作な書き手であった。様々な種類の形式やジャンルにおよぶ、漢文と日本語による数多くの著作を執筆しただけでなく、道元はこれらを書き直した。言葉を替えれば、道元は自分自身を書き直したのである。書き直しが頻繁であったため、道元の著作の多くは複数の版が現存しており、道元がその著作のどれかを本当に完成させたのかどうかについて確実に知ることは難しい。道元を書き直す、この端緒となったのは道元自身ではあったが、これは道元では完了し得なかった。道元以外の人間が、次のように道元を書き直したのである。最初は、新たな編輯本を作成するために道元の著作をまとめることによって、時にはこれらに新しい題目や巻数を付すことによって書き直した¹。第二として、最も注目に値するのは、道元の著作を印刷開板するにあたって、各編輯者が道元を書き直し、場合によっては、新たな集輯版を構成するために、著作の二つまたはそれ以上の異なる版を合本することによって書き直したのである。道元の著作の印刷開板には、道元を書き直すことが必然的に伴うばかりではなく、その写本の編輯、改訂、さらには書き直しのための編集上の方針もまた必要となるのである。

本稿では、道元の著述のうち最も著名な『正法眼蔵』のみに焦点をあてる。道元がどのように道元を書き直したのか、いくつかの例を挙げるこ

* 原題「Rewriting Dōgen」

** カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）・アジア言語文化学部教授（仏教学・日本宗教）

*** 公益財団法人中村元東方研究所専任研究員

から始めよう。道元が自分自身を書き直す過程について十分に理解するには、我々が今日読んでいる道元がすでに他者によって書き直されてきたという道のりについても考えねばならない。道元が著述の初稿で何を執筆したのか、そしてその後の改訂稿においてこれをどのように書き直したのか。これらについて知らなければ、道元が自分自身をどのように書き直したのか十分に理解することは不可能である。ごく最近まで、この種の情報を探し出すのは困難なことであった。道元の出版刊行版が抄録であったり、改訂版であったり、時には道元の著述の複数の版が合本されていたりといった形で、こうした情報は覆い隠された。道元の著作の編輯や校訂に関しては、日本の研究者による大きな業績がすでに存在している²。本稿では、すでに日本語の出版物として入手可能な情報を時に繰り返す。しかしながら、それを再検討するのは有益であろうと考える。この問題に関する研究は通例専門家に向けて論じられ、一般的な読者には理解しがたい専門的知識を前提としているため、分かりづらくなりうる。より広い範囲の読者が理解しやすいよう、この問題についての要点をまとめてゆきたい。

略称について

道元が何度も書き直しを重ねたために、『正法眼蔵』の写本には様々な種類が存在する。主要な異本の編輯本を列挙するだけで、『正法眼蔵』というテキストの持つ複雑さを垣間見ることができる。この主要な異本の編輯本について、ここからは、伝統的に附された卷（帖）数に基づいた略称によって引用する。大部分の写本では、各卷（帖）が一冊にまとめられるが、冊ごとの卷（帖）数の規準はない。それぞれの編輯本に対して、最も頻繁に結びつけられる謄本についても確認してゆく。

12-SBGZ（十二卷本『正法眼蔵』）

『新草』版。書名・『正法眼蔵』、十二卷。

謄本事項：写本は一本のみ。三冊、文安三年（1446）写、永光寺所蔵（石川県、EST 1）。

書写系統：本名不明の「新戒比丘」が応永二七年（1420）写本を転写。

28-SBGZ（二十八卷本『正法眼蔵』）

『秘密』版。書名・『祕蜜正法眼蔵』、二十八卷（「心不可得」・「佛道」は各々重複）。

謄本事項：写本は一本のみ。欠本を含む三冊（当初の二十八巻のうち二巻はほぼ散逸）、一四世紀中期（？）頃の転写か、永平寺蔵（福井県、EST 1）。

書写系統：不明。「祕蜜」という名称は、永平寺住持・承天則地（1744年没）が冊子に新たな表紙と木製の経函を製作した享保八年（1723）に遡る。経函には箱書として「祕蜜正法眼蔵 三巻」とある。「密」という字は蜂蜜の「蜜」と記される。これ以前の文書は残存せず。

60-SBGZ（六十巻本『正法眼蔵』）

「宋吾本」。書名・『正法眼蔵』、六十巻（「行持」は二巻として数える）。

謄本事項：諸本六写本のうちの一本。二十冊、永正七年（1510）写、洞雲寺蔵（広島県、EST 6）。

書写系統：金岡用兼（1437-1513？）写。康応元年（1389）に宗吾が謄写したものを、永平寺十五世光周（1437-1513？）が文明十二年（1480）年に再写したものを謄本とした。宗吾と光周による写本は現存しない。

75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）

「七十五帖本」。書名・『正法眼蔵』、七十五巻（「行持」は一巻として数える）。

謄本事項：二十四を超える諸写本のうち三本として、(a) 乾坤院本…十五冊、長享二年（1488）写、乾坤院蔵（愛知県、EST 1）。(b) 正法

寺本…二十七冊（全三十冊のうち三冊を欠く）、永正九年（1512）写、正法寺蔵（岩手県、EST 1）。(c) 龍門寺本…七十六冊、天文十六年（1547）写、龍門寺蔵（石川県、EST 2）。

書写系統：(a) 乾坤院七十五卷本正法眼蔵、乾坤院第二代住持・芝岡宗田（1500没）が、大林寺蔵（廃寺。富山県）、永享二年（1430）の写本を転写。この大林寺写本もまた總持寺（石川県）の通源による正慶二年（1333）の書写に基づく。(b) 正法寺七十五卷本正法眼蔵…正法寺第七代住持・壽雲良椿（1516没）の発願により書写。これは、竜門寺（山形県）初代住持・朴堂良淳（1500没）が文明四年（1472）に書写した、正慶二年（1333）付けの總持寺（石川県）・通源による書写本を写したもの。(c) 龍門寺七十五卷本正法眼蔵…龍門寺第二代住持・喆函芳賢（1551没）が永享二年（1430）の写本を興恵寺にて転写。この永享二年（1430）の写本は、正慶二年（1333）付けの總持寺（石川県）・通源による書写本を写したもの。大林寺本・朴堂本・興恵寺本・通源本は現存せず。正慶二年（1333）に75-SBGZを書写した通源を、1333年には単なる子供であった著名な通源寂霊（1322-1391）と混同してはならない。

84-SBGZ（八十四卷本『正法眼蔵』）

「梵清本」。書名・『正法眼蔵』、八十四卷（「行持」は一卷として数える）。
謄本事項：五十四を超える諸写本のうちの一本。十三冊（残欠本。もと二十五冊）、応永二六年（1419）写、徳雲寺蔵（広島県、EST 4）。
書写事項：徳雲寺八十四卷本正法眼蔵は、系譜未詳の諸本に基づき、太容梵清（1427没）が佛陀寺（石川県）にて書写。二種の正法眼蔵を統合。火災により部分的に損傷を受ける以前、正篇（二十冊）として七十五卷本正法眼蔵、別輯（五冊）として六十卷本正法眼蔵から九巻を収録した。本山本九十五卷正法眼蔵の刊行以前に、最も転写されかつ研究されたのが梵清編集の八十四卷本正法眼蔵であった。

89-SBGZ（八十九巻本『正法眼蔵』）

「卍山本」。書名・『永平正法眼蔵』。八十六巻（「行持」は一卷として数える）。

謄本事項：六十六を超える諸写本のうちの一本。二十冊、貞享三年（1686）。大乘寺蔵（石川県、EST 7）。

書写系統：卍山道白（1636-1714）自筆本。卍山は八十九巻本正法眼蔵を編集するにあたり、初めて年次順に配列。60-SBGZおよび75-SBGZに含まれない五巻を収録。

95-SBGZ（九十五巻本『正法眼蔵』）

「本山版」木版本。書名・『永平正法眼蔵』、九十五巻。

大愚俊量（1803没）・祖道穩達（1813没）・透關惠徹（1816没）編輯。60-SBGZおよび75-SBGZに含まれない八巻を収録。

この文化十一年（1814）の木版印刷版は、あらゆる『正法眼蔵』編輯本の内、初めての印刷本。もとは永平寺にて編輯・校訂されて木版として彫られ、二十冊として印刷された。目次には九十五巻が挙げられる（「行持」は一卷として数える。「心不可得」・「佛道」はともに重複）が、当初の簡略版（1814年）では五つの巻として白紙を挿入するのみであった。九十五巻全てが揃った木版印刷版は、明治三十九年（1906）に初めて印刷された。

再版：(a) 九十五巻を完備した近代の活字版としては、大内青巒(1845-1918)校注、明治十八年(1885)・明治二十九年(1896)、一卷。永平寺編輯、『本山縮刷版 正法眼蔵 全』、一卷、昭和元年(1926)・昭和二十七年(1952)。岸沢惟安(1865-1955)校注、『大正新脩大藏經』収録(no.2582)、昭和六年(1931)。衛藤即応校注、岩波文庫版、三巻(上・中・下巻)、昭和六年(1931)～昭和十八年(1943)・昭和三四年(1959)・平成

元年（1989）、平成十六年（2004）等。さらに（b）木版印刷版の再版、九十五巻を完備、昭和四九年（1974）～昭和五十年（1975）。

研究者は三百以上の前近代の『正法眼蔵』諸写本を調査してきた。上に挙げた七種は、研究者が明らかにした主要な編輯本または構成全てを示しているわけではない。しかし、他の構成の多くは、上記の編輯本の一つかそれ以上を土台とし、原文への添加や削除が伴う。『正法眼蔵』の書写系統全体という観点からすると、巻数（帖数）から異本の編輯本の確定を行うことは混乱をもたらしうるという点も忘れてはならない。いくつかのケースでは、完全に無関係な編輯本が同じ帖数であるのに、帖の配列や内容が異なることもあり得る。しかし、『正法眼蔵』に関する研究においては、編輯本の系統に帰せられる帖数によって確定される上記のような類型に言及するのが一般的な方法である。これらの編輯本の間に存在する関係については以下で考察することになる。

上に挙げた七種の『正法眼蔵』の編輯本は、道元によってすべて仮名（かな）と真字（まな、漢文）の混淆体で執筆された論考によって構成されている。道元はほかに、ほぼすべて中国語の出典から引用した公案から成るもう一つの『正法眼蔵』をまとめており、これはすべて漢文で執筆されている。これら二種の『正法眼蔵』については、以下の通りである。

Kana-SBGZ（仮名『正法眼蔵』）

和文の仮名文字の『正法眼蔵』。書名・『正法眼蔵』、道元著、和文と漢文の混淆体で記され、巻数（例えば十二巻本、六十巻本、七十五巻本）が附せられる諸編輯本へとまとめられた。

Mana-SBGZ（真字『正法眼蔵』）

漢文の『正法眼蔵』。書名・『正法眼蔵』、中国語の出典から道元が集

成した公案集、建長五年（1253）付けの道元による序文が附せられる。
謄本事項：諸写本七本のうちの一本。一冊六卷、宝暦二年（1752）写、
成高寺蔵（栃木県、EST 1）。
書写系統：露曉写。法幢寺（岐阜県）蔵、文明十三年（1481）の写本
に基づく正徳五年（1715）の写本を謄本とする。初期の諸写本は失わ
れたと考えられる。

道元による『正法眼蔵』の書き直し

道元による道元の書き直しの手法に関する一次資料は、現存する諸写本
の中に発見された文言の相違から成る。二次史料は道元の奥書に見られる
が、何本かの写本に現存するのみである。時には、奥書にこの二種の根拠
が確認される。この種の根拠について説明するため、二つの例を挙げるこ
とにしよう³。「例1」は、「60-SBGZ（六十巻本『正法眼蔵』）」に記され
る「洗面」の巻の奥書を引用したものである。

例1 「洗面」奥書 60-SBGZ（六十巻本『正法眼蔵』）

正法眼蔵洗面第五十

爾時延應元年己亥十月二十三日、在觀音導利興聖寶林寺示衆。

天竺・震旦國等には、國王・王子、大臣・百官、在家男女、朝野の百姓、
みな洗面す、神廟等も、あしたごとに洗面するあり。かくのごとく洗面して、
祖宗を拜し、現在せる父母・師匠を拜す、三界萬靈・十方眞宰をも拜す、
主君をも拜するなり。

いまは漁父・樵翁までも、洗面おこたらず。しかあれども、楊枝はしらず、

一得一失なり。日本國は嚼楊枝あり、洗面なし。

いま嚼楊枝・洗面、ともに修證せん、補虧闕の紹隆なり。正傳のうへの正傳なるべし、佛祖の照臨なるべし。

爾時寛元元年癸卯十月二十日、在越州吉峰精舍示衆。

(句読点を加えた。本稿382頁の例文1を参照。)

正法眼藏洗面第五十

延應元年(1239)己亥十月二十三日、觀音導利興聖寶林寺にて示衆した。

天竺・震旦國等では、國王・王子、大臣・内外の諸官、在家の男女、朝廷と民間の人々は、皆洗面しており、神廟等においても、毎朝洗面が勧められる。このように洗面して、祖宗を拝し、父母や師匠を拝し、三界の萬靈や十方の宇宙の主宰者を拝し、主君をも拝するのである。現在、漁民や木こりまでも洗面を怠らない。ではあるが、楊枝について知らないことは、一得一失である。日本國には嚼楊枝はあるが洗面はない。

いま嚼楊枝・洗面双方ともに修證することにより、前人の行いを受け継いで欠陥を補うのである。これは正傳の上の正傳であり、佛祖の輝くばかりに存在する姿であるはずだ。

寛元元年(1243)癸卯十月二十日、越州の吉峰精舍にて示衆した。

(六十卷本『正法眼藏』に載せられた)この「例1」の奥書と、「例2」の奥書とを比較してほしい。「例2」は、道元が書き直した同じ「洗面」の巻のもので、75-SBGZ(七十五卷本『正法眼藏』、龍門寺本)に記載されている。

例2 「洗面」の改訂版奥書 75-SBGZ (七十五巻本『正法眼藏』、龍門寺本)

正法眼藏第五十

延應元年己亥十月二十三日、在雍州觀音導利興聖寶林寺示衆

天竺國・震旦國者、國王・皇子、大臣・百官、在家・出家、朝野男女・百姓萬民、ミナ洗面ス。家宅ノ調度ニモ面桶アリ、アルイハ銀、アルイハ鐵ナリ。天祠神廟ニモ、毎朝ニ洗面ヲ供ズ。佛祖ノ塔頭ニモ、洗面ヲタテマツル。在家・出家、洗面ノノチ、衣裳ヲタダシクシテ、天ヲモ拜シ、神ヲモ拜シ、祖宗オモ拜シ、父母ヲモ拜ス。師匠ヲ拜シ、三寶ヲ拜シ、三界萬靈・十方眞宰ヲ拜ス。

イマハ農夫・田夫、漁夫・樵翁マデモ、洗面ワスルルコトナシ。シカアレドモ、嚼楊枝ナシ。日本國ハ、國王・大臣、老少・朝野、在家・出家ノ貴賤、トモニ嚼楊枝・漱口ノ法ヲワスレズ、シカアレドモ洗面セズ。一得一失ナリ。イマ洗面・嚼楊枝、トモニ護持セン、補虧闕ノ興隆ナリ、佛祖ノ照臨ナリ。

寛元元年癸卯十月二十日、在越州吉田郡吉峰寺重示衆。

建長二年庚戌正月十一日、在越州吉田郡吉祥山永平寺示衆。

(句読点を加えた。本稿382頁の例文2を参照。)

正法眼藏洗面第五十

延應元年(1239)己亥十月二十三日、觀音導利興聖寶林寺にて示衆した。

天竺・震旦國等では、國王・王子、大臣・内外の諸官、在家・出家の者たち、朝廷と世間の人々は皆洗面する。家の調度としても洗面桶が

あり、それは銀やスズ製である。天祠神廟においても、毎朝洗面が供される。佛祖の塔頭においても、同様に洗面が供される。在家者・出家者は洗面後、衣服を整え、天を拝し、神にも拝し、祖先に拝し、父母を拝する。師についても拝し、三宝を拝し、三界の萬靈や十方の宇宙の主宰者を拝するのである。現在、農夫・田夫、漁民や木こりまでも洗面を忘れることはない。ではあるが、楊枝をかむことが欠けている。日本國では、國王・大臣、老人と若者、朝廷と世間の人々は、身分貴き在家者・出家者も賤しい者も、みな楊枝をかみ、口をすすぐことを忘れない。ではあるが洗面を行わない。これは一得一失である。いま洗面・嚼楊枝ともに行い続けることによって、欠陥を補って興隆するのである。これは佛祖の輝くばかりに存在する姿であるはずだ。

寛元元年（1243）癸卯十月二十日、越州の吉峰精舎にて示衆した。

建長二年（1250）庚戌正月十一日、越州吉田郡の吉祥山永平寺にて示衆した。

例として挙げたこの二つのテキストを較べると、第一に、「例2」の方がかなり長いことに気がつく。「例2」は、101字が加えられて構成されている（句読点は除き、「例1」の241字に対して、「例2」では342字）。第二に、日付に気がつく。「例1」には、延應元年（1239）という日付がただ一つの記されるのに対して、「例2」には、延應元年（1239）・寛元元年（1243）・建長二年（1250）と、三つの日付が記される。ここから、「例1」は延應元年（1239）に執筆された初稿であることを示し、「例2」は寛元元年（1243）または建長二年（1250）の改訂稿、あるいは寛元元年（1243）に改訂され、再び建長二年（1250）に改訂されたものと仮定できるのかもしれない。とはいえ、このテキストについては、その執筆（「記」）と「示

衆」との関係性が明確ではない。第三に、日本の筆記体に通じている人は、「例 1」が平仮名（俗假名）で書かれ、対して「例 2」は片仮名（眞假名、この語についてはT 82.8cを参照のこと）を用いているのに気づくだろう。最後に、多くの語や句が削除され、加えられ、そして書き直されているのが分かる。

「例 2」では以下を削除している。

等
現在せる
主君をも拜するなり
正傳のうへの正傳なるべし

「例 2」では以下が加わっている。

出家
家宅の調度にも面桶ありあるいは銀あるいは鐵なり
佛祖の塔頭にも洗面をたてまつる在家出家洗面ののち衣裳をただし
して天をも拜し神をも拜し
三寶を拜し
國王大臣老少朝野在家出家の貴賤ともに嚼楊枝漱口の法をわすれずし
かあれども

「例 2」では以下が書き替えられている。

王子	→ 皇子
百姓	→ 百姓萬民
神廟等も	→ 天祠神廟にも
あしたごとに	→ 毎朝に
洗面して	→ 洗面を供ず
祖宗を拜し	→ 祖宗をも拜し

父母師匠を拜す	→ 父母をも拜す師匠を拜し
漁父樵翁	→ 農夫田夫漁夫樵翁
おこたらず	→ わするることなし
楊枝はしらず	→ 嚼楊枝なし
洗面なし	→ 洗面せず
嚼楊枝洗面	→ 洗面嚼楊枝
修證	→ 護持
紹隆	→ 興隆
照臨なるべし	→ 照臨なり

削除、添加、そして書き直しというこの過程は、道元に典型的なものである。これが道元のいつもの執筆方法なのである。道元の書き直しによって生まれる結果については、読者それぞれが判断せねばならない⁴。筆者の見るところでは、「例2」の方がより磨き上げられている。語彙がより洗練されているのである。長い表現も短い表現もよりバランスが取れており、「一得一失」に関する中心点もより理解しやすくなっている。二つの実践（洗面と嚼楊枝法）を奨励するにあたって道元が記す宗教的根拠には、より説得力があるように見受けられる。これらの限られた二つの例に基づく、七十五巻本の「洗面」の方が六十巻本よりも良い仕上がりであるように思われる。

道元の書き直しの方法に関わる資料は、懷葬による識語にも見つけることができるが、懷葬の識語が遺されるのはいくつかの写本だけに限られる。まず、用語について説明させてほしい。『正法眼蔵』の巻末に添えられたあらゆる覚書（notation）を「奥書」と称するのが研究者にとっては一般的だが、これを翻訳者が英語に訳すと、“postscript”若しくは“colophon”となる。ここでは筆者は、著者の奥書（postscript）と書作者の識語（colophon）とを区別した団野弘之の提案（1980, 6）に従う。言葉を替えると、筆者は、道元によって添えられた覚書は奥書と称し、懷葬（や他の書作者）によっ

て添えられた覚書を識語と称する。この用法であれば、二つの語の日本語（奥書と識語）と英語（“postscript”と“colophon”）における通常の意味にもより近いものとして対応する。

懷辨は道元の侍者として仕えたが、（他の職務と比べると）叢林におけるこの役職のため、懷辨は道元の原稿を管理することになった（すなわち、書状侍者としての責任を負ったのである）。懷辨は最終的に、永平寺住持として道元の後継者となり、住持職にあった間、道元の草稿を書写するとともに、書写について指揮をとった。「例3」として示すのは、28-SBGZ（二十八卷本『正法眼藏』）に記載される「深信因果」の巻に対する懷辨の識語である。書き直しの過程で道元が経た段階について、懷辨が言及している点に注目してほしい。

例3 「深信因果」 懷辨による識語 28-SBGZ（二十八卷本『正法眼藏』）

正法眼藏深信因果

彼御本奥書ニ云、

建長七年乙卯夏安居日、以御草案書寫之。未及中書清、定有可再治事也、
雖然書寫之。

懷辨。

（本稿383頁の例文3を参照のこと。）

正法眼藏深信因果

自筆の御本の奥書に、[懷辨は] 以下のように記す。

建長七年（1255）乙卯の夏安居の日に、[道元の] 御草案からこれを
書写した。[道元は] いまだ中間案または清書に至っておらず、必ず

や再治してさらに良いものにするつもりであろう。とはいえ、これを
書写した。

懷弇。

一行目はおそらくは懷弇の弟子の一人であった未詳の書写者の手によるものである。何故かといえば、彼が引用した懷弇の識語に敬称として「御」が使われているからである。引用の中で懷弇は、書写したこの文書は「草案」であるとし、さらに敬称として「御」を使っていることから、これが道元による、おそらくは道元の自筆であったことが暗示される。懷弇はこれを、挿入、上書き、取り消しや他の変更がない文書を指すと思われる「中書」または「清書」と区別している。懷弇は明らかに、もし道元がもっと長寿であれば、一度以上の手直し（再治）を望んだだろうと考えたのだった。この「草案」が清書までに到らなかったという懷弇の説明は、いつもだったら懷弇は道元から清書を受け取っていただろうということを暗示していると思われる。単に道元の下書きを書写したと懷弇が語る点に注意することが重要である。懷弇の識語のどこにも、こうした「草案」を自分自身で改訂したい誘惑に駆られたと示す箇所は見当たらない。

道元を書き直すにあたっての道元の役割、さらには書き直す過程の歩みは、現存する諸写本の中でほんの部分的に確認できるだけである。何本かの写本に遺された識語によって、道元の著述を書写し、書写を指揮するにあたっての懷弇の役割がほんの少しばかり明らかになっている。しかし文書の記録は断片的であり、推測の域を出ない。例えば、洞雲寺の60-SBGZ（六十巻本『正法眼蔵』）の写本には、四十四の巻に道元による奥書が、四十三の巻に懷弇の識語が附せられる。龍門寺の75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）には、七十一にのぼる巻に道元の奥書が附せられるが、懷弇の識語は一つもない（表1を参照）。奥書と識語の個数がこれだけ異なるということが、おそらく偶然発生したはずはない。これについては何らかの

理由があるだろうとは推測されるが、この意味とは何なのか、確実な根拠がないために結論を下すことは出来ない。この問題については、後ほど立ち戻るつもりである。これらの過程—道元の書き直しの過程と懷奘の書写の過程—のどちらもしっかりと記録されておらず、十分には分かっているために、二つの過程の正確な関係を実に見極めることはできない。これらの過程について認められてきた理解が時とともに展開したために、研究者が道元を書き直してきた方法—道元を集成、編輯、校訂、編集、そして印刷出版するという方法—もまた展開し続けている。

表1 60-SBGZと75-SBGZにおける奥書と識語の個数

	Postscripts by Dōgen 道元の奥書	Colophons by Ejō 懷奘の識語
60-SBGZ Tōunji 洞雲寺所蔵 60巻本	44	43
75-SBGZ Ryūmonji 龍門寺所蔵 75巻本	71	—

こうした編集面での展開の過程については、『正法眼蔵』の刊本・活字本の中で最も重要かつ影響力のある四本を検討することによって見極めることができる。

1815年・本山版 95-SBGZ（九十五巻本『正法眼蔵』、前記）

1969年・大久保版

75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）に12-SBGZ（十二巻本『正法眼蔵』）を加える（計八十七巻）。書名、『正法眼蔵』。大久保道舟校注。『道元禪師全集』（上巻）収録。別本として三巻のほか、補巻として七巻（95-SBGZには含まれるが75-SBGZおよび12-SBGZには含まれない巻）を収録。

昭和四六年（1971）には独立した書籍『古本校定 正法眼藏 全』として再版。

1970年・水野版

75-SBGZに12-SBGZを加える（計八十七巻）。書名、『正法眼藏』、水野弥穗子校注。『日本思想大系』第十二・第十三巻に収録。補巻として一卷（95-SBGZには含まれるが75-SBGZおよび12-SBGZには含まれない巻）を収録。平成二年（1990）に『原典日本仏教の思想』第七巻・第八巻として再版。

水野版は平成二年（1990）に単著の岩波文庫版『正法眼藏』全四巻として再版（従前の衛藤即応校注による95-SBGZ三巻を引き継ぐ）。補巻として六巻（95-SBGZには含まれるが75-SBGZおよび12-SBGZには含まれない巻）を収録。

1991年・河村版

75-SBGZに12-SBGZを加える（計八十七巻）。書名『正法眼藏』、河村孝道校注。『道元禪師全集』（本稿での略称はDZZ）第一・第二巻に収録。別本として七巻のほか、補巻として九巻（95-SBGZには含まれるが75-SBGZおよび12-SBGZには含まれない巻）を収録。

1814年本山版：何故刊行されたのか？

1814年・本山版（95-SBGZ、九十五巻本『正法眼藏』）は、『正法眼藏』出版の禁止令（正法眼藏開版禁止令）が解かれて初めて刊行された（Bodiford 2006, 18-20）。これに先立つ前世紀にわたって、曹洞宗の叢林の慣行の数々は争議の的となった。これは、寺院の継承方法について大改革—いわゆる宗統復古運動（Bodiford 1991を参照）—に乗り出そうとした

幾人かの曹洞宗の僧侶の尽力に端を発するものであった。日本の曹洞宗初期の文献の出版が、彼らの改革運動においては大きな役割を果たした。この運動の主たる指導者の一人、円山道白（1636-1714）は特に注目すべき代表例である。円山道白は以下のように、曹洞宗の古典的文献を自身独自の版で数多く刊行した。

寛文十二年（1672） 『永平廣録』（十冊）

延宝六年（1678） 瑩山紹瑾（1264-1325）著・『瑩山清規』（二冊）

貞享元年（1684） 『正法眼蔵・「安居」』

元禄十三年（1700） 『正法眼蔵・「面授」』

その間、円山は独自の円山版・『正法眼蔵』（89-SBGZ）も編輯し、これを刊行するつもりだったのは明らかであった。ところが、円山の批判者は、円山版の「面授嗣法」が、続いて文化十二年（1815）に出版された本山版（95-SBGZ、九十五巻本『正法眼蔵』）を含む他の版とくらべて、内容的に著しく異なっている点について指摘した。叢林の改革を支持する書状のなかで、円山は「面授嗣法」だけではなく「住山」からも引用するのだが、この「住山」は他ではまったく知られていない巻題なのである（吉田 1982, 909-915）。まとめると、円山の改革は対立の種をまき散らし、さらに円山による曹洞宗文献の編集（または書き直し）と出版の方法は懸念を引き起こした。突然、『正法眼蔵』の内容が論争の主題となり、既存の体制に対する脅威となったわけである。それゆえに、享保七年（1722）、徳川幕府は「永平寺の『正法眼蔵』の真本」（「永平寺室内之眞本」）について、その出版、書写、改訂や削除に関するあらゆる動きを禁じた。享保十二年（1727）、徳川幕府はこの禁止令の目的について、改革を推進するための道具として『正法眼蔵』から文言を切り取る行為（「撮要隠括」。熊谷 1982, 1028-1029）を防止するためであるとの見解を発表した。

寛政八年（1796）の終わりに、大愚俊量（1803年没）と祖道穩達（1813

没)によって提出された嘆願書のおかげで、永平寺は禁止令の免除を受けた。二人は『正法眼蔵』の公式な本山版が出版されれば論争にけりがつくと主張したのだった。大愚と祖道は改革の試みに関わる五つの巻を除いた縮約版のみを刊行するという構想を示した。ところが、彼らの嘆願書では、改革に関する言及はなく、これら五つの巻には他宗への批判の文言(「他宗江少々差障之言句」)が含まれるので除外せねばならないという名目を記したのだった。除外された巻は以下の通りである。

「佛祖」

「受戒」

「嗣書」

「自證三昧」

「傳衣」

幕府はこの縮約という方策を受け入れ、禁止令を免除したが、「書写者の誤写」(「魚魯之筆誤」。熊谷 1982, 1031-1035)が示す危険性について再度釘を刺した。

1814・本山版：その完成

本山版(95-SBGZ、九十五巻本『正法眼蔵』)は、永平寺独自の新たな『正法眼蔵』を世に示そうという明確な意図のもとに編輯された。この本山版は、最も権威ある、最もよく校訂され、最も完全で、最も包括的な、あらゆる特徴を備えようとした点から、他のどの編輯本とくらべても比類ないものであることが目指されていた。本山版は、どこにも見当たらない方法で他のあらゆる諸本を組み込もうとした。祖道穩達は本山版の序(「彫刻永平正法眼蔵縁由」、T 82.7a-c)および凡例(「彫刻永平正法眼蔵縁由凡例」、T 82.7c-10c)を執筆した。彼は自らの文言(以下、言い換えた抜粋を要約した)において、現存する他のあらゆる『正法眼蔵』の諸編輯本の問題点について、まず次のように力説している。

(1) 道元は本来百巻を執筆した。(2) 今にいたるまで開板の許可が下りないため、(3) 書写者皆が新たな誤りを犯している。(4) 今日、曹洞宗寺院が所蔵する諸編輯本には諸巻に文言の長短広略が存在する。(5) こうした違いが疑いを生じさせ、(6) 妄りに増補する口実として文言が脱落していたと言ひ張ったり、(7) 後人の改変だとして文言を削除する者がいる。(8) 結果として、後の世代に数多くの誤りが受け継がれてしまっていて、どの教えに依れば良いのか、宗義の正邪について誰にも分からなくなっている。

- 1 説示シ玉フ所ノ書、都盧一百巻。
- 2 祖師滅後ステニ五百五十ノ星霜ヲ經ルトイヘトモ、コレ書イマタ梓ニ鐫ルコトヲ許サレズ。
- 3 故ニ展轉拜寫ノ毎度ニ、文字章句ノ詳略、烏焉魚魯ノ錯誤無キコトアタハズ。
- 4 諸山古刹ノ室内ニ秘在スル所ノ諸本ト考讐シ、文句ノ長短廣略アルヲ見テ。
- 5 小見ノ邪疑ヲ生シ。
- 6 筆寫ノ疎脱ト謂テ妄ニコレヲ増補シ。
- 7 マタ後人ノ妄添ト爲シテ私ニ削除シ。
- 8 後來ノ晩學ヲシテ非非相傳ヘ、宗ノ邪正、法ノ實歸ヲ知ラザラシムルニ至ル。

(T 82.7a-b. 濁点を加えた。)

祖道穩達の「凡例」によると、現存する諸編輯本における数え切れないほどの誤りだけではなく、曹洞宗の諸寺院が所蔵する『正法眼蔵』の編輯本それぞれが互いに大いに異なっているため、人々が道を誤っているという。再び、祖道の意見を以下のように要約しよう。

(9) この書は、多くの師家が編輯してきたが、それぞれが何の方針もなしに独自の順次で巻を配列した。(10) 編集の方法も異なったため、編輯本それぞれもまた異なるものとなった。(11) 後の世代において、各派はそれぞれの先達が用いた諸編輯本に強く固執するようになり、互いの編輯本の正統性について論争が起こるにいたった。

9 コノ書、卷目ノ多寡編集ノ列次、古今ノ諸師家家不同ナリ。

10 編集ノ手各別ナルガ故ニ、編次モ亦随テ差異ス。

11 是ヲ以テ後世各自ニ其家家先人ノ編集ヲ固執シテ、卷目多寡是非ノ諍論出ルニ至ル。

(T 82.9a, 10b)

本山版(95-SBGZ、九十五卷本『正法眼蔵』)は、巻の配列についてまったく異なった方法を採用することによって、それらの論争においていずれかの肩をもつことを避けた。本山版では、道元の奥書の日付か、次いで奥書がない場合には懷焚の識語の日付に基づいて年代順に巻を配列し、日付不明の巻は後ろにまとめてある。

本山版は大成功を収めた。当初は三百から四百部だけが刊行され、曹洞宗の寺院だけに配布されたのだが、道元の名称としての「永平」とともに、道元の寺院である永平寺の名称という意味で、本山版はまたたく間に(印字された題目の通り)『「永平」正法眼蔵』となった。本山版がひとたび近代的な活字版として普及すると、それは現在世界中で名が知られる道元像の創出を促した。本山版は、最も頻繁に印刷され、研究され、引用され、抜粋され、選集に収録され、そして他の言語に翻訳されている版である。毎年永平寺が主催する眼蔵会で学ばれるのは本山版である。この本山版は曹洞禅の教師および修行者全員に知られている版なのである。本山版の存在そのものが、道元の著作の権威ある版を製作するのに最適任の寺院は永平寺のみ、という公言はされないが暗黙の主張を補強している。つまり、

他の曹洞宗の寺院や、それら寺院が所蔵しているかもしれない『正法眼蔵』の諸編輯本は、単に道元が本拠とした寺院のものでないという理由から、道元の遺産の指針としては信頼できないに違いないと暗示されていることになる。

製作された時代と状況を考慮すると、本山版は確かに優れた水準に達した。だが、今日の基準に照らすと、いくつもの欠点がある。本山版は、道元が認めるような『正法眼蔵』を再現しようと試みなかったのは間違いでない。むしろ、編纂者たちが『正法眼蔵』として思い描いたもの、すなわち、道元が『正法眼蔵』の刊行を指示するまで存命であったら、本人が創り上げたであろう『正法眼蔵』が示されているのだ。本山版が依拠した諸写本についても、本山版の各巻が正確にそれぞれの写本の原本と対応しないために、確信を持って確定できない。本山版の編纂者の立場で、今日の研究者が用いる写本の原本の多くを直接利用できたかは疑わしい。本山版開版の許可状に記された「永平寺の『正法眼蔵』真本」（「永平寺室内之真本」）とは、おそらくは具体的な現実というよりは理念型であった。本山版は権威あるテキストというよりも、折衷的なテキストといえる。言葉を替えれば、ここでいう「折衷的なテキスト」（*eclectic text*）とは、以前から現存する何本かの写本を、それらのどれとも一致しない形で校合した合成テキストを新たに編纂したということを指す。

本山版では、他の諸編輯本（28-SBGZ、60-SBGZ、84-SBGZなど）に見られるテキストの差違を校異しているが、異本のうちどれが幾分なりとも確かなものか確定する明確な方法論に従っているとは思われない。例えば、『辨道話』の場合を考えてほしい。道元の手になるこの初期の著作の存在は天明八年（1788）に刊行されるまで世に知られてはいなかった。ところが、本山版はこの巻について合計二十にのぼる字句の差違を列挙し、それぞれは他の一つの「一本」に基づいて確定されている。一体どのような文献がこれらの差違を提示できたのか？

おそらく、天明八年（1788）刊本版のための書写を行った人物が、テキ

ストに対する校訂を提案したのだろう。少なくとも、こうしたテキストの差違が含まれることから、ありえそうな筋書きが二つほめかされている。第一は、相応しい字句を選ぶ作業に関わることができて、かつそのつもりのある博学な僧侶たちがこの『辨道話』を読む、と編纂者が想定していた、という筋書きである（Cherniack 1994, 13-14を参照）。第二は、ある寺院の所蔵する写本の字句が公式の刊本から完全に消えていた場合、寺院の面子が失われるかも知れない、そうした事態を引き起こしかねない編集上の判断を、編纂者が避けたという筋書きである（水野 1970, 583）。

『正法眼蔵』の書写伝承（*manuscript history*）がまったくといっていいほど不明な時代に、信徒の読者に向けて刊行された公認版として、本山版—中立的、包括的なテキスト校合に基づいた折中的なテキスト—の編集方法は理にかなったものであった。だが、今日の読者が心に留めておかねばならないのは、これらの編集上の選択は、実際に道元が書きそして書き直した内容と配列とを可能な限り正確に再現するテキストを製作しようという意図には基づいていなかったという点である。以前には知られていなかった初期の諸写本を研究調査に利用できるようになるにつれ、そして『正法眼蔵』の書写伝承について私たちの理解が深まるにつれ、本山版のテキスト面での不正確さがより明らかになってきた。

『正法眼蔵』というテキストの歴史の展開について論ずる前に、本山版が『正法眼蔵』についてどのように説明しているか、まず見直すのが有益である。再び、祖道穩達の「凡例」を要約しよう。

（1、上述の通り）道元は本来百巻を執筆した…（12）ところがこれらの巻数については確固たる伝承はない。（13）建長七年（1255）に懷奘は道元の草案に基づいて75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）を編輯した。（14）嘉暦四年（1329）に永平寺第五世・義雲（1253-1333）は60-SBGZ（六十巻本『正法眼蔵』）を編輯して各巻に題号の頌を述作した。（15）これが「宗吾本」として知られる。（16）應永二六年（1419）に大容梵清（1427没）は、懷奘

の75-SBGZに含まれない散逸した九卷分を加えた84-SBGZ（八十四卷本『正法眼藏』）を編輯した。（17）永平寺の宝庫には秘密版28-SBGZ（『秘密正法眼藏二十八卷』）が収められており、これは弘安十一年（1288?）に書写されたものである。（18）この28-SBGZから八卷分を84-SBGZに加えれば、合計九十二卷となる。（19）永平三十五世・版梶晃全（1625-1693）はさらに三卷分を加えて、合計九十五卷（すなわち、95-SBGZ）とした。

- 12 コノ書全部ノ冊數。舊來定數有ルコト無シ。
- 13 七十五帖ハ... 建長七年乙卯ニ至テ、永平二代懷奘禪師、祖師ノ御草本ニ就テ書寫シ。
- 14 嘉暦四年... 義雲和尚自ラ正法眼藏六十卷ヲ集メテ、毎卷ニ題號ノ頌ヲ述作シ玉フ。
- 15 世ニイハユル宋吾本ト稱スル。
- 16 大容梵清和尚... 奘翁編集ノ七十五帖ニ散逸セル九卷ヲ寫シテ... 卷數都テ八十四卷トナス... 應永二十六年...
- 17 永平寺寶庫ニ秘在スル所ノ秘密正法眼藏ト題號スル本、二十八卷アリ... 弘安十一年戊子ノ九月晦日ニ寫ス。
- 18 秘密ノ中ヨリコノ八卷ヲ拔采シ、梵清本ノ八十四卷ニ増加シテ、都盧九十二卷トス。
- 19 永平三十五世晃全禪師... 三卷ヲ摺撫シテ、上ノ九十二卷ニ參合シテ、都テ九十五卷トナシ。

(T 82.9a・10b、9 b、9 c、10a)

今日、これらの主張全てが疑わしい、または単に誤りであることを我々は知っている。まとめると、懷奘が道元の草案を改訂または書き直し、懷奘、義雲と梵清が偶然から異なる卷数をまとめてバラバラな順序に配列した、とほのめかされている。道元に常に付き随った侍者、法嗣であり、永平寺住持として直々に後継者に選ばれた懷奘について顧みずに、懷奘が、

義雲と梵清と同等に扱われている。祖道穩達は、28-SBGZ（『秘密正法眼藏』二十八卷）の編纂は、非現実的なほど古い時期だと考えている（さらに他にも、その写本が懷奘の手になるとまで述べる。T 82.8c）。祖道は、本山版が九十五巻へと拡大した要因を版櫈晃全に求めるが、これは、最初の本版に彫刻が開始されて本山版の製作が開始される一世紀以上前に、版櫈晃全が死去したという事実を無視している。最も重要なのは、版櫈晃全の私家版より六年ほど先だって成立した卍山道白の94-SBGZ（九十四巻本『正法眼藏』）に、祖道穩達がまったく触れない点である。卍山本には、祖道穩達が版櫈晃全の決断による追加の三巻が既に含まれていた。さらに同じく、卍山道白が年代順の巻配列の先駆者であって、続いてこれが晃全版によって採用されたのであった。祖道穩達の解説が不正確であるにも関わらず、それらは一世紀もの間、一般通念となった。道元の死の三年後に懷奘が最初の『正法眼藏』（75-SBGZ、七十五巻本）を編纂し、およそ七十三年後に義雲が異なる版（60-SBGZ、六十巻本）を編纂した、人々はそれを事実として受け入れたのであった。

1969年・大久保版—その背景

大久保道舟（1896-1994）は、本山版（95-SBGZ、九十五巻本『正法眼藏』）の権威への挑戦の要因となった重要人物である。大久保は東京大学の史料編纂所において名高い経歴をほしいまにし、後に駒澤大学学長を務めた。曹洞宗寺院の歴史史料の収集、目録作成、撮影と翻刻の開拓に助力した。今日、その名は、一次資料を用いた信頼すべき初の道元の伝記研究の著者として記憶されている（『道元禪師傳の研究』、1953年。同修訂増補版、1966年）。さらに大久保は研究者のために資料類も編集した。資料原本に基づいた詳細な曹洞宗の歴史年表（1935年）と、日本中の曹洞宗寺院の重要文書を翻刻し注釈を附した数巻からなる文書集（1972年）である。加えて、大久保は道元の主要な著作全集の編集を担当した（1930年、1944年、

1969年)。

道元の伝記研究 (1953, 345-346; 1966, 312) のなかで大久保は、懷奘が『正法眼蔵』の初の編輯を担ったという祖道穩達の主張を引用した上で退けている。大久保の議論は、12-SBGZ (十二卷本『正法眼蔵』) に関する自らの考察から開始される。この12-SBGZ (十二卷本) は、昭和十一年 (1936) に孤峰智燦 (1879-1967) と永久俊雄 (別名は岳水、1890-1981) が永光寺で発見した、十二巻からなるそれまで知られていなかった版の『正法眼蔵』である。この12-SBGZ (十二卷本) が特に注目されるのは、第十二巻が「八代人覺」と題されることによる。12-SBGZ (十二卷本) のこの巻に附せられた識語には以下のように記される。

例4 「八大人覺」識語 12-SBGZ (十二卷本『正法眼蔵』)

正法眼蔵八大人覺第十二

彼本奥書曰

建長五年正月六日書永平寺

今應永廿七稔孟夏上旬日、於永安精舍衣鉢閣下拜書之、

于時文安三年三月八日、能州藏見保於藥師堂書之、

之意趣者、以此良結縁、

生生世世、見佛聞法、出家得道、供養三寶、濟度衆生、成等正覺。

永平末流小新戒比丘

(句読点を補った。本稿383頁の例文4を参照のこと。)

正法眼蔵八大人覺第十二

彼の本の奥書には次のように記される。

建長五年（1253）正月六日、永平寺にて書した。

今、應永二十七年（1240）の初夏〔陰曆四月〕、永安寺の衣鉢閣にて
謹んでこれを書す、

文安三年（1446）三月八日、能州・藏見保の薬師堂にてこれを書す、
私の念願とは、この良き結縁によって、
生をかさね生涯を重ねて、佛に見えて法を聞き、出家得道して、三寶
を供養し、衆生を救済し、完全なる覚りを達成することである。

永平末流の一介の新戒比丘

この識語そのものは、情報量が多いとは思われない。だが、同じ巻が本山版（95-SBGZ、九十五巻本）に第九十五巻として、さらには『秘密正法眼蔵』（28-SBGZ、二十八巻本『正法眼蔵』）中冊の第九巻（「中冊ノ九」）としても存在する⁵。本山版は明らかに『秘密正法眼蔵』を所依としているが、本山版では識語が書き換えられて巻数への言及が削除されている（すなわち、編纂者の視点に合致させるために「訂正された」ということである）。下に示すのは、『秘密正法眼蔵』（28-SBGZ、二十八巻本『正法眼蔵』）に載せられたままの訂正前のテキストである。この数十年、この識語の意味を解釈するにあたっては、相互に矛盾する方法の数々が研究者によって提唱されてきたことに注意してほしい。筆者の訳出は、1989年に出版された鏡島元隆（1912-2001）による詳細な分析に多くを負う。筆者は鏡島元隆の考察（1989）を、この識語に関する意味ある考察のための極めて重要な参考文献であると考えている。しかし、解釈の誤りについては筆者のみが責任を負うものである。

例5 「八大人覺」識語 28-SBGZ（二十八卷本『秘密正法眼藏』）

正法眼藏八大人覺第十二

本云

建長五年正月六日書于永平寺

如今建長七年 乙卯 解制之前日、令義演書記書寫畢。同一校之。

右本、先師最後御病中之御草也。仰以前所撰假名正法眼藏等皆書改、并新草具都虛一百卷、可撰之 云云。

既始草之御此卷、當第十二也。此之後、御病漸々重増。仍御草案等事即止也。所以此御草等、先師最後教勅也。我等不幸不拜見一百卷之御草、尤所恨也。

若奉戀慕先師之人、必書此十二卷、而可護持之。此釋尊最後之教勅、且先師最後之遺教也。

懷牂記之。

（句読点を加えた。本稿384頁の例文5を参照のこと。）

正法眼藏八大人覺第十二

〔道元の〕本には次のように記される。

建長五年（1253）正月六日、永平寺にて書す。

今は建長七年（1255）乙卯の解制の前日であり、書記の義演に書写させ終わった。私はそれをこれと校合した。

この文書は、先師の最後の御病氣中に執筆された御草稿である。先師は次のように詳しく語った。「この新しい草稿は、以前にまとめた仮名書きの正法眼蔵で、すっかり書き直したものとともに、計百巻となるだろう。」

すでにこの草稿の執筆は開始され、この巻は第十二にあたっていた。この後、先師の御病状はしだいに重くなった。結果として、御草案に関わる作業は止まってしまった。それゆえ、[私懷奘と義演が書写した]この御草稿は、先師の最後の教勅である。不幸にして一百巻の[新しい]御草稿を決して目にすることができないのは、なんと残念なことか。

もし先師を恋い慕い申し上げる者がいるならば、必ずこの十二巻を書写して、持っているがよい。これは釋尊最後の教勅であり、また先師が最後に遺した教えなのである。

懷奘がこれを記した。

懷奘の識語の最後から二番目の文は、この巻の内容をそれとなく暗示している。この巻は『遺教經』（大正蔵 no.389）からの引用句で構成されているのである。この巻と懷奘の識語は、28-SBGZ（二十八巻本）に遺されるとともに、（改訂された形ではあるが）本山版の95-SBGZ（九十五巻本）に収録されたとはいえ、その言外の意味は十分に理解されてはいなかった。それ以前、この識語は単に、病によって道元が『正法眼蔵』の執筆を止めざるを得なくなった年月を定めるのに用いらただけであった。発見された永光寺の十二巻本は、一から十二の番号が附せられた十二巻の草稿から成一つの書物であり、この発見によってある必要不可欠な背景がもたらされた。この背景の中で、28-SBGZ（二十八巻本『秘密正法眼蔵』）の写本に遺された識語は、今や新たな関連性を帯びることとなった。

これによって大久保は、「以前撰述した仮名書きの正法眼蔵で、完全に

書き改められたもの（以前所撰假名正法眼藏等皆書改）」という言葉によって道元は何を意図したのか、という疑問を抱くようになった（1953, 312-313; 1966, 282-283）。少なくとも、この言葉には鍵となる点が二つ含まれる。第一点、（懷奘ではなく）道元自身が『正法眼藏』という題を附したこと。第二点、（他の者ではなく）道元自身が少なくとも『正法眼藏』を二組編集したこと。「前に撰述した（前所撰）」一組で既に関書直されたもの（大久保が称する所の「舊草」）だけではなく、（第一から第十二まで巻数がふられる）十二巻からなる未完成の「新草」、がこれにあたる。「書誌學的立場から観て」、「舊草」が75-SBGZ（七十五巻本『正法眼藏』）を構成しているはずだと大久保は論じた。例えば、75-SBGZ（七十五巻本『正法眼藏』）は12-SBGZ（十二巻本『正法眼藏』）と同じ巻が一つも含まれない編輯本として唯一知られるものである。したがって、75-SBGZと12-SBGZを結合すれば、（道元の目標には十三巻分足りないが）そのまま八十七巻のまとまりが生まれるということになる。

大久保はこの七十五巻に十二巻を加えるという関係性の妥当性を確立するための前段階として、先ず、（道元ではなく）懷奘が道元の示寂後数年の建長七年（1255）に七十五巻本正法眼藏を編輯した、という本山版「凡例」の見解を論駁する必要があった。大久保の議論（1953, 345-351; 1966, 312-317）は以下のように要約できる。第一に、道元の直弟子である詮慧（生没年不明）は『正法眼藏』の注釈書（『御聞書』、弘長三年（1263）年に完成）を執筆したのだが、もっぱら75-SBGZ（七十五巻本『正法眼藏』）に含まれる諸巻に焦点があてられており、詮慧の注釈は同様に第一から第七十五の番号が附せられている。もしこの七十五巻が懷奘によって選択されて配列されたと仮定したら、詮慧の立場ならば彼独自の巻を選択しただろうと私たちが思いたくなるのも当然だろうこと。第二に、詮慧の注釈に用いられる「七十五帖」（七十五巻）という語が、編輯本全体を指す決まり文句であると思われるような形で用いられる点である。

大久保はこうした用法の実例をいちいち引用はしないが、河村孝道は引

用を行っている。詮慧は以下のように記す。

此義先師ノ御調ナレドモ、七十五帖ノ假名ノ正法眼藏ニハ不見トコタヘム
輩ハ、非正嫡、先師ノ會下トハ不可謂
(句読点を加えた。EST 11.306。河村 1986, 490を参照。)

先師自身の言葉でこの意義が述べられている七十五帖（巻）の仮名の
正法眼藏を読んだことがないと認める者は、正当な仏弟子でもなければ、
先師のもとで修行した者とも称することはできない。

さらに第一巻「現成公按」に対する自身の注釈において、詮慧は以下の
ように記す。

今ノ七十五帖、ツラネラルルータノ草子ノ名字ヲアゲテ、現成公按トモ云
ベシ…第一ノ見成公按ニテ、第七十五ノ出家マデヲナジ義ヲノブル也
(句読点を加えた。EST 11.8, 10。河村 1986, 490を参照。)

これら七十五帖（巻）は、草子それぞれに題を附して配列してはあるが、
全てを「現成公按」と称することができよう。…第一〔巻〕の「見成
公按」から、第七十五〔巻〕の「出家」まで、全巻同じ意味を述べて
いるのである。

これら二つの引用が示すのは、詮慧が75-SBGZ（七十五巻本『正法眼藏』）
を統合されてまとまりのある一つの著作と見なしていたということである。
それ以上に、第一の引用は、75-SBGZ（七十五巻本『正法眼藏』）が
道元自身の著作であることをはっきりと示し、道元の仏法の継承者（法嗣）
であればそれぞれがこの著作から教えを受けていたというのである。第二
の引用は、「現成公按」が第一巻となった理由を暗示している。「現成公按」

は七十五巻にのぼる全巻の主題の土台となっている。したがって、道元が諸巻を順不同に並べたのではないと思われる。

大久保の反証の第三点は、懷奘があれこれの巻を書写したと様々な識語が示している、道元の示寂後の日付からなっている。巻に附せられた数とそれが書写された日付の間には明確な関連は存在しないと大久保は指摘する（1953, 346; 1966, 313）。こうした関連性の無さからは、道元示寂後に懷奘が書写する時点以前の段階で、既に巻には巻数が振られていたことを示すと大久保は論ずる。さらに、同じ時期にかけて、懷奘は75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）には記載されない諸巻についても書写を行った。とりわけ注目に値するのが、懷奘が12-SBGZ（十二巻本『正法眼蔵』）の諸巻を書写していたことである。そして、残りの生涯において、懷奘は様々な諸巻の書写を続けたのであった。問題の日付は、懷奘が新たな版の編輯を進めたのではなく、単に将来の保存に向けて、既に存在していた編輯版から巻数付の諸巻を書写していたに過ぎないことを明示するものだと大久保は主張している。

最後に大久保が示すのが、非常に説得力のある論拠である（1953, 347; 1966, 313）。75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）を道元自身が編輯したと決定的に示すような、直接的かつ具体的な書誌学的論拠は存在するのかと、大久保は問う。大久保の回答は、是、つまり存在するというものである。大久保は、「佛性」に附せられた懷奘の識語を引用する。これは永平寺で発見された正嘉二年（1258）付の懷奘真筆の写本である。懷奘真筆の写本を確認する前に、まずは75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）と60-SBGZ（六十巻本『正法眼蔵』）に載せられる「佛性」の奥書と識語を検討するのが有益であろう。

例6 「佛性」奥書と識語 75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』、龍門寺本）

正法眼藏佛性第三

爾時仁治二年辛丑十月十四日、在雍州觀音導利興聖寶林寺示衆

天文丁未二月廿四日書焉

按了

(句読点を加えた。本稿384頁の例文6を参照)

正法眼藏佛性第三

仁治二年（1241）辛丑十月十四日に、雍州の觀音導利興聖寶林寺において示衆した。

天文丁未（1547）二月二十四日、[喆菡芳賢によって] 書写と校正が完了した。

龍門寺の75-SBGZ（七十五卷本『正法眼藏』）では多くは記されない。執筆の日付（1241年）と場所を記した道元の奥書を載せるに過ぎない。続いて、龍門寺第二代住持・喆菡芳賢が、自らが書写を終えた日付（1547年）を記す識語が載せられる。この識語が喆菡のものと分かるのは、この筆跡と日付が、この龍門寺版写本の他の諸巻の最後の識語に記される日付と名と一致するからである。

例7 「佛性」奥書と識語 60-SBGZ（六十卷本『正法眼藏』）

正法眼藏佛性第三

爾時仁治二年辛丑十月十四日、在雍州觀音導利興聖寶林寺示衆

于時弘長元年辛酉夏安居日、在越州吉田郡

吉祥山永平寺以

先師御草本書寫之。彼本所々散々書

消入或書入或被書直、仍今校合書寫之也

小師比丘懷牂

建治三年夏安居日、書寫之

寛海

嘉慶三年正月廿日、在永平寺衆寮奉書寫之

宗吾

(句読点を加えた。本稿385頁の例文7を参照のこと。)

正法眼藏佛性第三

仁治二年（1241）辛丑十月十四日に、雍州の觀音導利興聖寶林寺において示衆した。

弘長元年（1261）辛酉の夏安居の日に、在越州吉田郡吉祥山永平寺にて、先師〔道元〕自筆の御草本を書写した。この草本は所々に上書き、書入れや書き直しだらけのため、今ここにこれを校合して書写を完了した。

先師の弟子・比丘懷牂

建治三年（1277）の夏安居の日に、これを書写した

寛海

嘉慶三年（1389）正月二十日、永平寺の衆寮にて、これを書写した。

宗吾

60-SBGZ（六十巻本『正法眼蔵』）はより多くの情報が加わっている。前の奥書をそっくりそのまま写し、さらに懷奘が書写した日付（1261年）が記される。加えて、道元の原稿における数多くの上書き（「書消入」）、語句の書き込み（「書入」）、そして字句の書き直し（「被書直」）について所見が記される。写本の書写の日付に関する寛海（義雲の弟子）と宗吾（永平寺第九代住持）による二つ目の識語も附せられる。しかし総合すると、実際のところ75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）と60-SBGZ（六十巻本『正法眼蔵』）は元のテキストの展開についてそれほど多くの情報を明かしてはくれない。これらを以下の懷奘の真筆の文書と比較してほしい。

「例8」「佛性」巻の奥書と識語、懷奘真筆

佛性 正法眼蔵佛性第三

仁治二年辛丑十月十四日記于觀音導利興聖寶林寺

同四年癸卯正月十九日書寫之 懷奘

爾時仁治二年辛丑十月十四日在雍州觀音導利興聖寶林寺示衆

再治御本之奥書也

正嘉二年戊午四月廿五日以再治御本交合了

（本稿385頁の例文8を参照のこと。）

佛性 正法眼蔵佛性第三

仁治二年（1241）辛丑十月十四日に、觀音導利興聖寶林寺にて記す

同四年（1243）癸卯正月十九日にこれを書写した。懷奘

爾時仁治二年（1241）辛丑十月十四日に、雍州の觀音導利興聖寶林寺にて示衆した。

〔上記のテキストは〕書き直された〔道元〕自筆の御本の奥書である。

正嘉二年（1258）戊午四月二十五日に、書き直された〔道元〕自筆の御本について校合を完了した。

これら三本はすべて、道元が仁治二年（1241）に興聖寺で「佛性」を執筆したと認めている。60-SBGZ（六十卷本『正法眼蔵』）の識語を懷奘の真筆と並べて読んでみると、かなり込み入った書き直しの過程が見えてくる。懷奘は先ず仁治四年（1243）に清書を作成した。後に、道元がその清書を書き直した。したがって正嘉二年（1258）に、懷奘は自分の清書と道元が書き直した書とを校合したのであった。最終的には、弘長元年（1261）に懷奘は自らが校合した版の清書を作成した。懷奘の真筆写本では、仁治四年（1243）の書写は単に「佛性」という題目であるのがすぐに分かる。後に、この題目は上書きされて、新たな題目、つまり「正法眼蔵佛性第三（第三卷）」となった。

大久保はこの証拠を次のように解釈している（1953, 349-352; 1966, 315-318）。先ず、大久保は直接に原本を検討し、墨の濃さと筆の勢いから、「正法眼蔵佛性第三」という題目の墨と筆致は正嘉二年（1258）に校合した清書に一致すると判断を下した。墨の濃さの違いについて大久保は、懷奘が仁治四年（1243）に初めてこのテキストを清書した時点（そして道元が仁治二年（1241）に初めてこれを執筆した時点）では、道元ははまだ『正法眼蔵』という題目を選んでいなかった証明だと捉えた。ところが、死の少し前に道元は自らのテキストを書き直したが、その時点で懷奘が自分の書写したものを校正するのに用いていたのは元の道元のテキストであった。

大久保にとって、書き直しにおける道元の役割は決定的なものである。懷奘は単に書写したに過ぎないということなのである。懷奘は、自らの思いつきで書き直しを行うことはなかった。さらに大久保は、「佛性」という語に『正法眼蔵』という題目を書き加えて、巻数を加えたのは道元自身であると指摘する。この文書が、道元自身が各巻を巻数で並べて編輯し、『正法眼蔵』という題目を附したという決定的証拠であると大久保は論ずる。この証拠とともに28-SBGZ（二十八巻本『正法眼蔵』）に遺された「八大人覺」の識語とに基づいて、道元が『正法眼蔵』全体の構想をまとめただけでなく、道元は『正法眼蔵』を七十五巻に十二巻を加えた（つまり八十七巻の）順序で読まれ、書写され、そして保存されるよう目論んでもいた、という説得力ある主張を締めくくった。

ここで、私たちは大久保から離れて、上記の識語について再検討せねばならない。これらの識語は一卷にのみ関わるだけであるため、識語に示された手順がどれほど典型的なものでありえたのか知るのが難しいからである。とはいえ、この一卷の展開は、道元と懷奘が行った書き直しの方法論に関する重要な鍵を明らかにしてくれる。懷奘に関する限り、彼は道元の自筆原稿の写しを書き直すという、明らかに特別骨の折れる手順を踏んでいた。道元が自分のテキストを書き直すと、懷奘は道元の改訂の書き込みに基づいた新しい清書を単に作成するにとどまらなかった。かわりに、少なくともこの巻の場合、懷奘は先ず、自分で作成済みの以前の清書を再び書いた。懷奘は、道元手書きの上書き、挿入された句、そして書き直された文言について、自分が作成した清書に同じメモを書き入れることによって、注意深く再現していった。同様に重要なのは、懷奘が自らの進捗状況を示すために数多くの所見を記したという点である。後に、懷奘が最終的に書き直された原本を清書した際、懷奘はそれに関する新しい識語（既に引用した60-SBGZのもの）を執筆してこれまでの過程について簡潔にまとめた。懷奘がこれらの所見を自分自身のために執筆したのはまず間違いない。懷奘が道元の改訂版の清書—これはより広い読者に読まれ、書写され

ることになる—をついに完成させた時点で、自らの識語を完全に削除したのは確実であると思われる。道元がどれほど書き直しを行ったか、あるいは懷奘が新しい清書を何度作成する必要があったのか、懷奘は人々に知られたくは無かったのだろうことは想像に難くない。おそらく懷奘は自分のための個人的メモとしてだけ識語が役立つようにと考えたのだろう。自分の識語を削除することによって、懷奘は読者の意識が、とりわけ著作者としての道元の役割だけに集中することに任せたのである。この推論にのっとれば、75-SBGZと12-SBGZは何故懷奘の識語を欠くのか説明できるだろう（これらの識語に関する異なる解釈については、河村 1986, 504-511を参照のこと）。

懷奘の自筆は、道元がどのようにして執筆し、書き直しを行ったかに関する鍵も与えてくれる。第一に、道元がこの巻の書き直しを行った後でも、懷奘が元の日付を残している点に注目してほしい。この事実からは、道元の奥書が示すのは執筆を開始した日付だけであって、執筆を完了した日付ではないことが分かる。こうした理由から、現存する諸写本によって、本山版の95-SBGZ（九十五巻本『正法眼蔵』）が試みたような、個々の巻の日付に基づいて確実な年代配列を構築することは出来ない。第二に、仁治二年（1241）に道元は「記」という語を記したが、この巻の書き直しを行った仁治三年（1242）以降しばらくして、道元はこの「記」を削除して替わりに「示衆」という句を記した。この書き直しの重要性を解釈するのは困難である。これらの語は同じ過程を指すのか、それとも違う過程を示すのか？ 第三に、道元が草稿を執筆した時、附した題目は「佛性」など主題に関わるもののみであった。この巻の書き直しを行うまで、道元は直ちにこれを『正法眼蔵』の一巻であるとは称さなかったし、また、巻数も振ることはなかった。何本かの草稿—例えば「生死」や、おそらくは「唯佛與佛」など—は、『正法眼蔵』という地位に昇るにあたって十分に書き直されることはなかった。これら二つの巻は、少なくとも12-SBGZ（十二巻本『正法眼蔵』）、60-SBGZ（六十巻本『正法眼蔵』）や75-SBGZ（七十五巻本『正

法眼蔵』)には一度も組み込まれなかった。

この第三点は、遅くとも仁治四年(1243)まで道元は『正法眼蔵』という題目を採用していなかったという大久保の論考を、今日では受け入れることは難しいという事実を反映している。昭和二八年(1953)に大久保が自身の考察を出版した時点では、一般的な常識としては、『正法眼蔵』の編輯は歴史的な偶然であると推定されていた。つまり、道元示寂後しばらくしてから、弟子や信徒たちが道元の日本語の教説(假名法語)を収集し、編集し、合本して成ったものを『正法眼蔵』と称したと推測されていたのだった。大久保のように、こうした過程を道元自らが行ったと主張するのは斬新なことであった。その時期、道元が『正法眼蔵』という題目—その時代には、大慧宗杲(1089-1163)の中国語の著作(『正法眼蔵』)の名称としてよく知られた—を用いようとしたという考えさえもが受け入れ難いものだった。この点を認めると、道元が答えていない二つの問題が浮かび上がってくる。第一に、何故道元ともあろう者が、他の者によって既に使われた題目を使うことを望んだのか? 第二に、何故よりによって大慧なのか?

なにしろ、道元の著述には大慧に対する批判が含まれている。さらに大久保が執筆を行った1950年代には、研究者は真字『正法眼蔵』(Mana-SBGZ)が道元によって編纂された真正なものかどうか疑問を抱いていた。このような学界の雰囲気の中で、大久保は、道元自身が『正法眼蔵』という題目で文書を執筆したという議論の余地のない論拠を求めた。利用可能な最もよい論拠は、(真字『正法眼蔵』ではなく)懷奘自筆の「佛性」巻の書写であると大久保は考えたのだった。

今日、我々はより多くを知っている。真字『正法眼蔵』の真正性は確立されている。道元はこれを完成させ、序を執筆し、そして説法を始めて間もない嘉禎元年(1235)に『正法眼蔵』という題目を与えたのだった。河村孝道(1987など)と石井修道(1988など)の両者が出版した緻密な文献学的分析によって、道元の漢文の『正法眼蔵』(Mana-SBGZ)と仮名の『正

法眼蔵』(Kana-SBGZ)の間には密接かつ持続的な関係が存在していたことが証明された。道元が自らを書き直す―道元を書き直す―という当初の試みは、真字『正法眼蔵』としてまとめた教説を日本語の語彙と文字を用いて表現しようと決心した時に始まった、と言って差し支えない。道元が日本語で執筆した個別の著述をまとめ、そして書き直して「假名ノ正法眼蔵」というさらに大きな編纂物へと組み込み始めたのがいつの時点かについて、確信を持って述べることはできない。だが、『正法眼蔵』という名称はかなり早く成立したことは疑いの余地はない。道元が浩瀚な仮名書きの『正法眼蔵』(Kana-SBGZ)を編纂しようと決心したのは、自らの真字『正法眼蔵』の序を執筆した直後か、さらに前だったのはまず間違いない。

平成十三年(2001)、角田泰隆は懷焚自筆の「佛性」巻全てを詳細に翻刻して刊行した。そこで角田は、道元の書き入れ、挿入された句、さらに書き直された文言すべてを注意深く再現した。角田の論文は、道元や『正法眼蔵』に関心を持つ者であれば目を通すべきものである。この論文は、道元が著述について一単に執筆者と言うだけではなく、改訂者として一言葉の達人であったことを明らかにしている。「佛性」の中で、道元の批評眼と熟達した筆捌きから逃れた節はほぼ皆無であった。道元は文書の語彙、語句、文言、さらには長い段落についても書き直した。こうした改訂からは、道元がどれほど自身の著述にあたって作業の骨を折ったかが、極めてはっきりと分かる。道元は一字一句に心を砕いた。決して気楽に執筆したり、推敲を行わないといったことはなかった。自らの説示を書き直すという道元の労多き試みは、我々にとって有益な忠告である。それは、道元が最終的に執筆した内容を最も正確に再現した現代版のテキストを選択するにあたって、我々も同様に心を砕かねばならないということなのである。

1969年・大久保版と1970年・水野版

七十五巻に十二巻を加えた『正法眼蔵』を支持する1960年代までの大久

保の論考は、研究者の間に広く受け入れられた。ところが、こうした『正法眼蔵』が正確にはどのような形をとりうるのかについて、まだ誰にも分からなかった。七十五卷に十二卷を加えた現代版の道元のテキストを生み出そうと試みる前に、問わねばならない問題を何点か挙げよう。(1) 本山版を新たな巻の順序に単に並べ替えるということが可能か？ (2) 白紙状態から始める方が良いのだろうか？ (3) 仮に(2)を選択するとしたら、では新たな版が基礎を置く底本を選択する基準はどのようなものになるのか？ (4) 諸写本のうちどれがそのような基準を最も良く満たすのか？ (5) 適切な底本に基づいた諸写本を、出版に向けていかに翻刻し、校訂し、編集すべきなのか？ これらは答えるのが簡単な問題ではない。これらの問題一つ一つについて、全員が納得する回答はおそらく一つもないだろう。以下においては、大久保、水野、そして河村がこれらの問題への取り組みにおいて、どの点で意見が一致し、そしてどの点で意見が分かれたか確認してゆきたい。

大久保は昭和四四年(1969)に、『道元禅師全集』上巻(改訂増補版)として、七十五卷に十二卷を加えた大久保版『正法眼蔵』を出版した。その一年後、水野弥穂子は寺田透(1915-1995)との共編として『道元』を出版した。二巻からなる『道元』は高名な『日本思想大系』に収録された。大久保版と水野版の双方ともに単独の書籍として再版され続け、広く読まれている。双方とも研究者の間で優れた評価を受けている。また双方ともに驚くほど内容と方法論的前提が類似している。大久保と水野がともに、上記の問題にほぼ同じように回答していることは、それぞれの解説に明快に、またはそれぞれの著書本文の中にさりげなく示されている。二人が必ずしも全く同じようにこれらを実行しているという訳ではないが。こうした理由で、双方の版の違いはどのようなものであれ、かえって問題を明らかにしうる。短くまとめると、大久保と水野は以下のように上記の問いに応じている。

(1) 本山版を再利用することは可能か？

否。両者ともに本山版の不備を認識していた。自らの序において、大久保は「〔道元〕禪師の眞筆本及び古寫本類が多數發見せられ、その書誌学的調査研究が進んだため、舊版のままにして置くわけにはいかなかった」(大久保1969,「序」1)と力説している。水野は、「まだ全古写本をあつめてその成立をさぐるといったことなど行われる時ではなかった」(水野1970, 1. 583)と率直に述べている。

(2) まったく新たな編輯本を作成すべきなのか？

是(かつ否)。大久保と水野は双方ともに全面的に新たな版を編集した。ところが詳しく検討すると、両者が伝統の重みに縛られているのが分かる。両者は多くの点で、それぞれの著書がより真正なものと思ってもらえるよう編集に取り組んだのだが、その一方で、それぞれの著書を可能な限り本山版に対応させている。この問題については以下で詳細に論ずるつもりである。

(3) 底本を選択する基準は何か？

これは、昭和四六年(1971)の大久保版の再版の副題から明白だが、この基準は大久保自身だけではなく、水野も採用した。それは「古本」(すなわち、十七世紀以前の写本)を標榜するものである。文献学の用語を用いれば、大久保と水野はオリジナルのテキスト(original text)、つまり原本の元来の形(archetype)の持つ究極的權威の信奉者であった。この方法論は、道元示寂後、あらゆる時代の書写者が改変を行ったという本山版の編集者の見解を反映したものである。この基準に則ると、編集者としての両者の目的は、第一に現存する最古の写本を確定し、そして第二にこうした写本に記されるテキストを原始の内容へと復元することであると推定できるだろう。

(4) 諸写本のうちどれが、こうした基準にかなうのか？

大久保と水野は両者ともに同じ写本群を選択した。大久保は「凡例」(大久保同上,「凡例」5-6)において、好ましい順に列挙している。(a) 第一、道元の真筆本、(b) 第二、懷奘の筆写本、あるいは(c) 第三、他の古写本、これらが利用できないのなら、(d) 第四、永正七年(1510)の洞雲寺の60-SBGZ(六十巻本『正法眼蔵』)、(e) 最後に、長享二年(1488)の乾坤院の75-SBGZ(七十五巻本『正法眼蔵』)、である。水野は自らの基準についてはこれほど明確にはしていないが、まったく同じ優先順を用いている。

大久保と水野双方が、実際の75-SBGZ(七十五巻本『正法眼蔵』)に収められるテキストには最低の権威しか認めなかったのにもかかわらず、自ら新たな75-SBGZ(七十五巻本『正法眼蔵』)を生み出したという点に注目してほしい。両者ともに、この決断がはらむ矛盾に気がついていなかった。また、両者ともにこの矛盾の理由について説明もしなかった。とはいえ水野は、自らの『正法眼蔵』新版に向けてのテキストの編輯(「本文作成」)について、その考えを解説の中で明らかにしている(水野1970, 1.576-589)。まず、水野は自らの考えについて、「正法眼蔵はどの巻序で読むべきか？」という問いの枠組みで示す。水野はこれに「正法眼蔵は七十五巻本に十二巻本を加えたもの(計八十七巻)が本来の姿である」と即答している。そして、諸本・諸版の書写について論じてゆく。洞雲寺の60-SBGZ(六十巻本『正法眼蔵』)が光周一永平寺第十五世住持—によって書写された写本を元にしてしている点から、これこそが真正の永平寺に伝わった『正法眼蔵』を代表するに違いないと結論づけている(同上、586)。さらには、これが「草假名」で書かれることから、これが道元と懷奘による真筆写本にみられるのと同様の綴り方を体現している⁶。このように、これが「道元の真筆に近い倣を伝えている」。明言はされないが、水野の所見は、75-SBGZ(七十五巻本『正法眼蔵』)よりも洞雲寺の60-SBGZ(六十巻本『正法眼蔵』)の方が道元の本来の意図を伝えているとほのめかしているように思われる。

大久保と水野が75-SBGZ(七十五巻本『正法眼蔵』)に12-SBGZ(十二

巻本『正法眼蔵』を加えた各巻の底本として選択した詳細な一覧については、附録資料（１、２）を確認してほしい。以下の一覧は付録資料の底本情報を要約したものである。

表２ 1969年・大久保版および1970年・水野版における75-SBGZの底本

底本	大久保版の巻数	水野版の巻数
60-SBGZ Tōunji 洞雲寺所蔵 60巻本	43	46
75-SBGZ Kenkon'in 乾坤院所蔵本 75巻本	25	23
Eiheiji old ms. 永平寺所蔵古写本	3	3
Ejō autograph 懷奘真筆書写本	2	2
Kōfukuji old ms. 広福寺所蔵古写本	2	2
Dōgen holograph 道元真筆本	1	1
28-SBGZ Himitsu 秘蜜正法眼蔵 28巻本	1	1
Zenkyūin old ms. 全久院所蔵本古写本	1	1
合計	78	79
(注) 二本の底本をもつ巻	3	4

大久保版・水野版の75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）について、両者はほぼ同じ底本群を選択した。しかし、それぞれの12-SBGZ（十二巻本『正法眼蔵』）の版については、両者はかなり異なる選択をした。

表3 1969年・大久保版および1970年・水野版における永光寺の12-SBGZの底本

底本	大久保版の巻数	水野版の巻数
12-SBGZ Yōkōji 永光寺所蔵 12巻本	12	2
60-SBGZ Tōunji 洞雲寺所蔵 60巻本		7
28-SBGZ Himitsu 秘蜜正法眼蔵 28巻本		3
合計	12	12

永光寺の12-SBGZ（十二巻本『正法眼蔵』）について、大久保と水野は異なった底本群に依拠している。大久保が実際の永光寺の写本を選択したのに対して、水野は他の編輯本に収められた対応する諸巻を選んだ。75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）および12-SBGZ（十二巻本『正法眼蔵』）について数えると、大久保は洞雲寺の60-SBGZ（六十巻本『正法眼蔵』）から合計43巻分、一方水野は同60-SBGZから53巻分（46巻＋7巻）を選択している。両者の版はともに、75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）よりも60-SBGZ（六十巻本『正法眼蔵』）のテキストをより重視しているのである。

（5）このテキストはどのように翻刻され、校訂され、編集されるべきなのか？

上の表2と表3（さらにはこの元となった付録資料1と2）が示すように、大久保版と水野版は双方ともに折衷主義に頼っている。本山版の場合と同様に、彼らの取った方法論は、かねてから現存する何本かの諸写本を校合するものだが、出来上がった校合テキストは現存の写本のどれとも一致はしない。時折、両者は同じ巻の土台として二種類の異なる写本を用いた。つまり、同じ巻のいくつかの箇所がそれぞれ、異なる書写系統のテキストに由来していることになる。例えば、第六十二巻「祖師西來意」の場合、その最初の部分は洞雲寺の60-SBGZ（六十巻本『正法眼蔵』）を底本

とするのだが、後半部分は、道元の真筆と伝えられる永平寺所蔵の古写本を底本としている（大久保 1969, 1.522脚注）。

異本が部分的に統合されたこのような底本がなぜ必要なのだろうと疑問に思う人もいるかもしれない。大久保のテキスト選択の基準が、可能な限り道元の真筆を選択すべきと規定するものであれば、どうしてまた大久保は道元の真筆を後代の写本で補う必要があると考える必要があるのだろうか？ 大久保はこの問いには答えていない。想定できる回答は、大久保のテキスト校訂の方法の中に見つけることができる。その「凡例」において、大久保は自らの手続きについて、「本文校訂の順序は、先ず底本を中心に、各對校本との相異を明かにし、これを本山版眼蔵の内容と對比して妥當な判定をくだし」（大久保1969, 5）と説明している。言葉を替えれば、可能な限り本山版の内容に最も近い方法を選択しようとする、ということなのである。大久保の心の内では（そして実際のところ、今日にいたるまでその読者の心の内では）、本物の『正法眼蔵』とは、本山版の九十五巻本であり続けているのがここに明らかなのである。大久保はよりきちんと整い、そしてより正確な版の『正法眼蔵』を提供したいと望んでいたが、この本山版から大きく逸脱することなど考えられなかったのであった。

大久保は水野にくらべると、底本を書き直すことにより前向きであった。底本の編集方法についての両者の違いは、二人が用いた題目を検討すればすぐに分かる。例えば、第十六巻の「行持」について考えてみよう。75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）ではこの巻は二部から構成されるが、60-SBGZ（六十巻本『正法眼蔵』）では前半・後半それぞれが個別の巻として数えられる。大久保と水野は一つの底本（洞雲寺の60-SBGZ）を前半に、その他の底本を後半に用いている。もう一つの底本は廣福寺所蔵の古写本で、これは道元の真筆と伝えられている。『正法眼蔵』では、伝統的なアジアの文献の多くと同様に、各巻や主要な節には、その巻首と末尾に巻題が附せられる。巻首題と尾題は必ずしも同一ではなく、異なる場合もありえる。洞雲寺の60-SBGZ（六十巻本『正法眼蔵』、EST 6.165a, 196b）

では、「行持」二巻の尾題は、次のとおりである。

60-SBGZ（六十巻本『正法眼蔵』）

正法眼蔵仏祖行持第十六 上

正法眼蔵佛祖行持第十七 下終

大久保（1969, 1.139）と水野（1970, 1.190）はともに第十六巻（「行持」前半）の尾題について、洞雲寺の60-SBGZ（六十巻本『正法眼蔵』）の写本のままとした。ここまでは良いのである。ところが、廣福寺の写本（EST-D 189b）では、「行持」の後半の尾題は、全く違った体裁に見える。この写本のテキストは草稿のように思われる。『正法眼蔵』という題目もなく、さらには巻数も振られてはいない。次のような簡素な内題が付けられている。

佛祖行持

水野は、廣福寺の写本に見られる尾題そのままを再現した（水野同前書、221）。一方の大久保はそうはしていない。かわりに、次のような尾題を付したのである（大久保同前書、161）。

正法眼蔵佛祖行持第十六 下

大久保が採用した体裁は、ほんの少しの変更はあるものの、洞雲寺の60-SBGZ（六十巻本『正法眼蔵』）の写本が用いた表現と体裁に対応している。この尾題に付した脚注において、この表記の源泉として玉雲寺（京都）の84-SBGZ（八十四巻本『正法眼蔵』）の写本（1445年）を引用している。要するに、大久保は十五世紀の対校本を用いて、道元の真筆と考えたより

古い写本を校訂したのである。

この校訂は「調整による一様化」(*regularization*)として広く行われる編輯方針の一例である。すなわち、本文中におけるつじつまの合わない異名や異形などの諸要素を書き直して、内的な整合性をもたらす事を指す。自ら底本とした写本に対する忠誠心に価値を置くよりも、大久保は内題の体裁の一致により大きな価値を置いたように思われる。一様化によって、混乱を招く可能性のある不揃いな差異が除去されて、読者の助けとなるのである。だが同時に、三本の底本（すなわち、洞雲寺本、廣福寺本そして玉雲寺本の写本）を校合することによって、大久保はそれぞれから個別の特徴を剥ぎ取っていることになる。大久保は統一感のあるテキストを創り出している。読者に注意深さがないと、大久保版ではどの底本を読んでいるのか見分けるのは、いずれにしても簡単ではない。巻全体が一つの底本に基づいている場合さえ、個々の文言はその他の対校本に由来する可能性がある。混乱の可能性が減ったことと引き換えに、読者は大久保の編集上の決定を信じなくてはならないのである。

大久保と水野はまた、日本語の仮名遣いの編集方法の点でも異なっている。日本の歴史の様々な時代を通じて、日本語の語彙の読み方が変化したのと同様に、一般的に用いられる仮名遣いもまた変化した。ところが、貴族階級の中には、和歌を書く際に古典的な仮名遣いに忠実であることにこだわる者たちも存在した。近世期、こうした前代の仮名遣いが「歴史的仮名遣い」として体系的にまとめられた。これらは現在、古文あるいは文語体の重要な構成要素となっている。道元の仮名遣いは今日認められる古典的基準にはたいてい一致しない。道元の変則的な仮名遣いは、現代の読者にとっては混乱のもとになりうる。何故かというと、古典的な仮名遣いが使用されていると、その他の仮名遣いには伴わない、廃れたニュアンスや文法的機能に、読者の注意を向けてしまうことがあるからなのである。

こうした難点を回避するため、多くの編者は「標準化」(*normalization*)という方針を採用する。すなわち、本文以外の一般的なテキストの適正基

準に合うように本文を改訂するという方針である。大久保は次のように複合的な方策を採っている。「假名遣は、眞筆本并に懷葬の筆寫本については聊も手を加えず原本のままとし、その他のものは、すべて歴史的假名遣に改めた」という（大久保 1969「凡例」, 6）。水野は対照的に、底本に記されるそのままの假名遣いを再現する。読者の助けとなるよう、難解な語については適正な假名遣いを括弧にくくって示している（水野1970, 1.6）⁷。水野は同様に異体字についても許容している。よく知られた仏教用語、例えば、（通常の「公案」に替えて）「公按」、そして（通常の「密語」に替えて）「蜜語」など、道元が多くの異体字を用いて記すままに再現している。こうした編集上の選択の背景には、「読者に道元の真筆の痕跡をいくらかでも届ける」という水野自身の願いがあるのだろうと推測することができる。

1991年・河村版

平成三年（1991）に河村孝道は自身による二巻組『正法眼蔵』の第一巻を出版した。これは酒井得元（1912-1996）、鏡島元隆、そして桜井秀雄（1916-2000）が監修した新たな『道元禪師全集』全七巻（DZZと略す）の第一巻・第二巻となった。1960年代初頭、河村は—永久岳水と小坂機融とともに—『正法眼蔵』に関わる資料類を探すため、全国各地の曹洞宗寺院・叢林の調査を広く実施した。現地調査の間、彼らはおよそ三百部を超える『正法眼蔵』の写本の目録を作成し撮影を行ったが、これらの中にはおよそ百九十部の完本が含まれていた⁸。そこで小坂と河村は、発見した最も貴重な資料の複写影印に注釈を附した二つの叢書、EST（『永平正法眼蔵菟書大成』、全25巻、1974-1982年）とEST-Z（『永平正法眼蔵菟書大成 續輯』、全10巻、1992-2000年）を刊行したのであった。別巻としてEST-D（『道元禪師眞蹟關係資料集』、1980年）も刊行された。これは、道元、懷奘、そして二人の直弟子に帰す非常に貴重な資料類、その膨大な数に及ぶ複写影

印を一卷にまとめたものである。平成三年（1991）年に河村と眞鍋俊照は、初期に成立した『正法眼蔵』の写本六版を四十五冊の実寸大の影印版（和装本）として刊行するにあたり、編者をつとめた。その同じ年、河村は永平寺と協力して三冊組の二十八巻本『秘密正法眼蔵』の実寸大影印版の刊行を監修した。その間、昭和六一年（1986）には『正法眼蔵』の文献としての成立の歴史、すなわち、その原本、編輯本、伝承の系譜や注釈の伝統に関する自らの研究の概要をまとめた大著（831頁）を出版した。

要するに、河村は道元と道元が遺した著作に関わる研究において、一大変革の最前線に立ち続けてきた。河村（とその同僚たち）の努力の成果のおかげで、今日では、かつては寺院の物置の保管庫に施錠されて手の届かなかった写本や文書・記録の痕跡を、世界中の研究者たちが簡単に検討することが可能である。より重要な点は、1960年代からの膨大な数の新たなテキストや記録の目録作成や刊行によって、筆写の実施や写本に関わる文化的規範について膨大なデータが提供されたという点である。一昔前の世代の研究者は用いるものがほぼ無い状態で、本物の証明もなく来歴も未詳の資料から得られた、ほぼ行き当たりばったりのデータを基礎として新たな解釈や年代配列を提案するのがせいぜいであった。それとは対照的に、今日の研究者は、目録となり、日付が附せられて、一つあるいは複数の書写系統の中に位置づけられるまとまった資料類を典拠として研究を行うことができる。こうした観点で私たちが前述の問題に戻ると、第一の問題点は省くことができる。平成三年（1991）には、本山版に戻る可能性はなかったのであった。

（2）まったく新たな編輯本を作成すべきなのか？

是（かつ否）。河村は大久保や水野とくらべると、本山版という遺産にはそれほど縛られてはいないように見えるが、日本の道元研究者なら誰でも、曹洞宗の伝統の重みから完全に自由になるのはおそらくは不可能である。河村は専門的見地から新しく七十五巻に十二巻を加えた新たな『正法

眼蔵』を編輯したものの、河村の編輯本には、七巻分の異本のほか、九巻分の別巻（本山版に含まれたが、75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）や12-SBGZ（十二巻本『正法眼蔵』）には見当たらない巻）が含まれる。この点から、河村は先行の1969年・大久保版を踏襲していることになる。この大久保版には三巻分の異本のほか、七巻分の別巻が含まれる。このように河村は、先達である大久保と同様、本山版に登場するのと同名の巻全てを読者が読むことができるようにしている（但し、筆者が数えたところ大久保版の巻数は二巻少ないのだが、これはこの二巻を大久保が自身の全集の『正法眼蔵』の結集から清規の結集へと移したからである）⁹。河村版を際立たせているのは、底本となる写本の選択方法と編集の手際なのである。

（3）底本を選択する基準は何か？

1969年・大久保版と1991年・河村版が同名であるのは残念なことである。附録資料1と2を一瞥するだけで、75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）に彼らが用いた底本の点から見て、両者による版はこれ以上ないだろうというほど異なっている。以下の表は、大久保版と河村版に関する付録資料から、底本情報を要約したものである。

表4にはっきりと示される通り、大久保（と水野）が色々な組み合わせのテキストで編集したのに対して、河村は実際に75-SBGZを含む一本の写本のみに依拠した。言葉をかえれば、（現存する写本としては物理的に存在しない）理想の75-SBGZを創り上げるために、多種多様な写本のテキストの部分を結合させるよりも、実在する75-SBGZの写本の完本から、河村は利用できる最良のものを選択した。何故この方法を採用したのか河村は説明はしないが、これは西洋書誌学の研究における「コピー・テキスト（copy-text）」的な編集方法に類似しているように思われる¹⁰。もともと「コピー・テキスト」という術語は、単に底本（つまり、印刷版となる複写用のテキスト。McKerrow 1939, 12 n1）のことを意味していた。シェイクスピア研究者のマッケロウ（R. B. McKerrow, 1872-1940）とその弟子た

表4 1969年・大久保版と1991年・河村版における75-SBGZの底本

底本	大久保版の巻数	河村版の巻数
60-SBGZ Tōunji 洞雲寺所蔵 60巻本	43	
75-SBGZ Ryūmonji 龍門寺所蔵本 75巻本		75
75-SBGZ Kenkon'in 乾坤院所蔵本 75巻本	25	
Eiheiji old ms. 永平寺所蔵古写本	3	
Ejō autograph 懷奘真筆書写本	2	
Kōfukuji old ms. 広福寺所蔵古写本	2	
Dōgen holograph 道元真筆本	1	
28-SBGZ Himitsu 秘蜜正法眼蔵 28巻本	1	1
Zenkyūin old ms. 全久院所蔵本古写本	1	
合計	78	76
注：二本の底本を持つ巻数	3	1

ちによって用いられるにつれ、この「コピー・テキスト」は、校訂版の編者が依拠すべき「最も権威あるテキスト」であるという言外の意味を持つようになった¹¹。このコピー・テキストは必ずしも著者が執筆した最初の原文である必要はない。マッケロウ（1939, 18）は、これを「著者による最終段階にある作品の清書」と述べている。多くの場合、コピー・テキストとなるのは、著者が書き直し、訂正し、発展させ、あるいは要約した後の版であり、これこそが、著者が世界に遺そうとした最終版テキストの形をよりよく体现したものに当たる。とすると、こうしたコピー・テキストを全体として確定し、「一目瞭然かつ明白な誤りを除いて、可能な限り正確にこれを再版する」（1939, 7）のが編者の仕事ということになる。

道元の場合、道元が執筆したかった『正法眼蔵』—人々に読んでもらい、そして書写してもらう事を望んだ『正法眼蔵』—は彼の当初の草稿には存在しない。むしろ、それは道元の書き直しからなるテキスト、つまり清書の方に存在している。現存する全ての『正法眼蔵』のテキストのうち、文献学的な根拠がはっきりと示すのは、75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）の中で、書き直された改訂稿から構成される諸本、つまりこれらが道元のコピー・テキストを最もよく代表するという点である。道元が75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）の書き直しをはたして完成させたのか、確実に知ることは出来ない。（懷奘の引用する）道元の言説の中で、道元は「以前仮名で執筆した正法眼蔵で、完全に書き直したもの」について述べているが、これは道元が書き直しを完了したということを示すものである。さらに、もう一つ同様の示唆にあたる不思議な手がかりがある。75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）における、第一巻「現成公案」の道元による奥書（ただし六十巻本には収められない）は、以下のように謎めいた一節で締めくくられている。

建長壬子拾勒

（建長四年（1252）編集・校正）

この日付（「建長壬子」）の解釈は簡単である。道元示寂の前年にあたる。「拾勒」（編集・校正）の意味はそれほど明確ではない。この語は道元の著述のどこにも確認は出来ない。実際、この語はどこにおいても確認されないと思われる。「勒（編集）」は収集するまたは集めることに対応する一般的な動詞である。「勒（校正）」はやや特殊な用語に対する試みの訳出である¹²。日常的な文脈においては、この漢字は馬勒や手綱を指す名詞であり、さらにここから語義が広まって「抑制する」（すなわち、制限する、管理する、配置する、支配する）という動詞として用いることが可能である。

語義の背景から、これは一般には、特に記念として石や金属に文言を彫刻する（配置する）という行為を指す動詞として働く¹³。だがこの漢字はこのような彫り刻まれたテキスト（の配置）を指す名詞としても用いられ得る¹⁴。こうした語義上の背景からすると、配置、テキスト、そして彫り刻むという行為には瑕疵があってはならず、もし瑕疵があれば記念物は台無しになるということになる。このように考えると、この「勒」という語は完成と最終的な状態を示唆するものである。奥書や編者の注記において、この「勒」という語はさらに特別な意味を帯びる。一般的には、この語は書籍の巻数を決定する編集行為（勒成巻数）を指す。中国と日本の仏典の中では、この語は何度もこうした意味で使用されている¹⁵。

この奥書では、道元が「現成公案」を執筆したのは天福元年（1233）、つまりこれがまとめられて校正される十九年前であることも記される。たった一つの巻の最終稿をまとめるのに十九年もかかったと考えるのは難しいこと、さらには「拾勒」という語が複数の対象を暗示すると思われる点から、この語は、単に第一巻を指しているだけではなく、『正法眼蔵』全七十五巻（75-SBGZ）が建長七年（1252）に最終的な順序が決まって校正された最終稿となったと示していると思われる。だがこの推論は、知識と経験に基づく推測にすぎない。仮にこれが的確であるならば、遅くとも建長七年（1252）までは、道元は依然として執筆と書き直しを行っていたと示していることとなるだろう。言い換えれば、このテキストに関わる道元の作業は、奥書に記された最後の日付（1246年）以降も続いたということだ。従って、謎めいた「拾勒」という語句は、道元が75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）を決定稿として完成させたばかりではなく、これが道元の生前最後の年の作品であることを示唆するのである。

道元の12-SBGZ（十二巻本『正法眼蔵』）については、河村も大久保も現存する永光寺の12-SBGZのテキストを十二巻すべてとして選択した（但し水野の選択は異なる）。

(4) どの写本がこうした基準に最もよく当てはまるのか？

河村版の重要な特色の一つが、道元の七十五巻本『正法眼蔵』を自ら編集するにあたり、現存する75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）の各種写本の中から、底本として一つの完本に依拠した点である。不必要な繰り返しに聞こえるとしても、河村の選択は、やはり繰り返す価値のある簡単な主張を反映している。つまり、75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）のテキストを確定する最良の底本を構成するのは、75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）の各種写本であるという点である。近代以前の『正法眼蔵』の完本の大多数が、(個別の諸巻とは対照的に) 75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）から構成されている。とはいえ、これら各種写本の大部分は、他の編輯本から諸巻を増補して七十五巻本から拡充されている。75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）だけで構成された写本群はかなり珍しいのである。

75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）のコピー・テキスト（複写用の底本）として、河村は最も古い写本（1488年、乾坤院蔵）、つまり大久保と水野が自身の版において、他の編輯本に存在しない諸巻のために用いた写本を選択しなかった。かわりに、河村は天文十六年（1547）に喆菡芳賢が作成した七十六冊の龍門寺本を典拠としている（但し、以下で論ずる通り、例外が一つある）。昭和四七年（1972）に河村が初めて発見して撮影するまで、その存在は全く知られていなかった。喆菡芳賢は自ら書写を行うにあたって永享二年（1430）の写本を底本としたが、この永享二年の写本は、これがないと世に知られることはなかった總持寺の通源という名の人物による正慶二年（1333）付の写本に基づいたものであった。總持寺の格式と影響力から（中世期の日本において、總持寺は曹洞宗寺院の最大門派の本山という役割を担っていた）、他の75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）の各種写本の多くはこの通源系統のものに遡りうる（河村1986, 512）。

これらの中で、喆菡が書写した写本には注目すべき特徴がある。第一に、通源のテキストは改訂のない非常に忠実な書写である点。喆菡は特に生真面目な書写者であったように思われる。テキスト内に誤記と喆菡が考えた

箇所を発見した場合、喆函は訂正せずただ余白に注記した（例えば、「密語」に対して「蜜語」とした喆函の注記を参照のこと。EST 2.527a）のである。喆函は同様に、天文十六年（1547）に瑩山紹瑾（1264-1325）の『傳光録』も五冊組として書写を行ったが、これもまた正確であると評判が高いものである。第二には、大部分の写本は多くの冊数から構成され、一冊に複数巻が載せられるのに対して、龍門寺の75-SBGZ（七十五卷本『正法眼蔵』）は一冊につき一卷（本末という上下に分かれる「行持」巻は二冊になっている）であるという点。各冊の中は、一丁が毎面六行で構成されている。この毎面六行、一冊一卷という形式は、『正法眼蔵』の各種写本の最古層に確認される形式に合致するものである。テキストが一枚あたり同じ行数で書写されると、校正はより容易になる。永享二年（1430）と正慶二年（1333）の写本は現存しないため、これらが同じ形式で書写されたのか知ることは出来ない。

（５）このテキストはどのように翻刻され、校訂され、編集されるべきなのか？

河村版は75-SBGZ（七十五卷本『正法眼蔵』）に含まれる通りに75-SBGZのテキストを再現しようとしている点から、編集作業はほぼ必要なかった。河村は一般的な改訂作業、つまり片仮名を平仮名表記に改めること、段落分けと句読点を附すこと、そして古語の読み方に一致するよう歴史的仮名遣いに統一すること、を施した。

河村の編集方法のうち最も注目すべき特長は、河村が龍門寺本に関わる最小限の範囲の諸本にとどめて本文校異を行うと決めた点である¹⁶。この方法論はコピー・テキスト編集（*copy-text editing*）に類似するもので、明白な誤記を除いて訂正は行わず、コピー・テキストに忠実であることを良しとするものである。どの誤記を訂正するか決定するにあたって、ほとんどの専門家はコピー・テキストと系統上最も近い関係にある諸写本に依拠する。この目的のため、芝岡宗田の書写による長享二年（1488）写の乾

坤院（愛知県）の75-SBGZ（芝岡宗田は1459年頃、『傳光録』の現存最古の写本の書写も行った。）、そして永正九年（1512）書写の正法寺（岩手県）の75-SBGZが特に重要であることが分かった。この二本と龍門寺本はテキストとして従兄弟同士の関係にあたる（EST-S pp.112-113, 119-120。DZZ 2.673を参照）。龍門寺本と全く同様に、この二本は、その系統が正慶二年（1333）付の通源の写本に遡るのである。原本を同じくするとは言っても、それぞれの直接の親本同士は地理的にも時間的にも距離があった。乾坤院本は永享二年（1430）付の富山県の写本から転写されたもので、一方の正法寺本は文明四年（1472）付の山形県の写本から転写されたものである。それぞれの地理的な隔たりにもかかわらず、乾坤院本（愛知県）、龍門寺本（石川県）、正法寺本（岩手県）は互いに密接な関係にある。それぞれの75-SBGZのテキストはおおむね一致しており、傍注や補遺などもまた密接な関係にある。『正法眼蔵』古写本の各巻の識語の後ろに補遺（道元の著述や仏典からの引用）が添えられることは珍しいことではない。乾坤院本、龍門寺本、正法寺本それぞれの各巻には、全く同じ補遺が附せられる。少なくとも第五十四巻の「洗淨」では、三本ともに同一の補遺が附されており、我々が知る限り、それは現存する『正法眼蔵』の他の各種写本には見当たらない（乾坤院本、EST 1.365b-366a。正法寺本、EST 1.718a。龍門寺本、EST 2.632、DZZ 2.627-628を参照のこと）。

原本を同じくし、密接な関係にあるこれら諸写本は、本文校異を行うにあたって最良のテキストとなっている。これらによって、龍門寺の75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）における書写者の誤記を、密接に関わる二本と比較することが可能となる。これら二本を傍証として利用することができるおかげで、一世代前の編集作業の問題点を回避することが可能となっている。本山版の95-SBGZ（九十五巻本『正法眼蔵』）と大久保版の75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）と12-SBGZ（十二巻本『正法眼蔵』）では、編者が見つかることのできたありとあらゆる諸本（後代の書写者による校訂を経たものさえ含まれる）が傍証としてテキストの校異が行われ

た。結果として、大久保の場合は特に、時として読者が途方に暮れるほど数多くの校異の注を列挙している。多くの注は権威ある印象を抱かせるのに役立つのかもしれないが、実際にはテキストの信頼性から注意をそらすものとなっている。これらの注は統一感のあるテキストを生み出すが、使用した出典それぞれの性格や特長を完全に欠いている。これに対して河村版は校異のためのテキストの数を限定した。どの読み方が最も信頼できそうか、そしてどの部分が書写者の誤りなのか確定するのに役立つ諸本に限定して校異を行ったのである。この方法によって、現在入手できる最も正確な75-SBGZの復元が約束されるのだ。

河村版のその他の特色二つについても述べなくてはならない。第一の特色としては、第二十八巻「禮拜得髓」について、河村版は底本として二本の写本を結合させている。これは1969年・大久保版および1970年・水野版と共通する特色である。大久保と河村は実直に二つのテキストを校合したと注を附したが、その説明や根拠は提示しなかった。ところが水野は、この巻は男性優位に対する批判であって、これに先だつ七世紀にわたる日本の歴史において、類を見ないほど女性の平等を擁護したものだと述べる(水野1970, 584-585)。実際、『正法眼蔵』を知る誰にとっても、この巻は本山版の95-SBGZ(九十五巻本『正法眼蔵』)の第八巻として読まれてきた。本山版は草稿を刊行しているが、これは道元が75-SBGZ(七十五巻本『正法眼蔵』)を書き直した際に短縮したものであった。とはいえ、女性を差別しないという主張の重要性から、水野版の75-SBGZ(七十五巻本『正法眼蔵』)には、草稿から失われたテキストが附せられている。おそらくは大久保と河村は水野の意見に同意したのだろう。

河村版の注目すべき第二の特色は、漢字の字体に関する考え方についてである。たいていの場合、河村版では道元の一般的ではない異体字の漢字については正字体に改められ、旧体字に替えて新字が使われる。しかしながら、特定のキーワード、例えば「辨道」(「辨」や「弁」ではなく「辦」)など、異体字が明らかに別の言外の意味を表す場合、旧字体の異体字のま

まとしている。とはいえ、こうした場合に当てはまらなければ、新字が使用される（例えば「弁別」は「辦」のかわりに「弁」で記される）。このようにして、河村版は、異なる綴りが意味上の重要性を伝える例について読者の注意を喚起している。

道元を書き直す：結論

道元を書き直した人物として道元について語ることによって、筆者は道元を人間らしくすることに寄与したいのである。理想化された宗祖としての道元、あるいは比類なき哲学者としての道元といった固定されて凍りついた姿に替えて、苦闘する書き手としての道元について我々が思い描くことができるようにと望んでのことである。どこにでもいる書き手同様、道元は自らの雄弁さを完成させるために懸命に執筆した。道元は書いては直し、そしてまた書き直したのだった。

道元の早すぎる死によって、その著作すべてに最終的な形が与えられる十分な時間は残されなかった。道元は様々な段階にある著作を遺すことになったのだった。懷奘が綿密に記録を取ったことは、書き直された道元の著作だけではなく、かなりの場合、道元の草稿の保存にも役立つこととなった。道元のいくつかの著作を様々な形—草案、中間案そして最終的な清書—で我々が所有しているという事実は、研究者が今まで十分に研究してこなかった貴重な資源なのである。道元の手書きの過程—その方法論、中国禪の言葉を生き生きとしたまま日本語の話し言葉という媒体に移し替えようという試みを繰り返したこと、さらに日本語で禪の言語を創造するための様々な試み—を注意深く検討するかわりに、研究者たちは、それぞれに異なる版が校合されて混ざり合った上で整合性を持つこととなった道元の諸文献に依拠せざるを得ないことがしばしばであった。

同時に、コピー・テキスト（複写用の底本）として使用された諸本（例えば12-SBGZや75-SBGZ）を無視して、別の書写系統の奥書や識語（例え

ば28-SBGZ、60-SBGZ、75-SBGZ）が一緒くたに並べられて刊行されているというあり方によって、研究者と一般の読者は誤った方向に導かれてきた。異種・別系統の奥書や識語が一緒くたに並べられて掲載されることによって、書写者の誰もが同じテキストを筆写していて、全てのテキストは一つの大きな共通の書写系統に属するという誤った印象が助長されがちになる。これは事実とは異なる。手短に述べれば、テキストの諸版すべてを校訂して互いに校合することによって、道元の著作の諸本には、テキストに一書写の誤りを除いては一大きな違いは存在しないという誤った印象が与えられてきた。ある時には異なる諸版は互いに一致するが、またある時にはそうではないのである。

1991年・河村版の出版によって、我々は今や、75-SBGZ（七十五巻本『正法眼蔵』）と12-SBGZ（十二巻本『正法眼蔵』）の各種写本版を土台とした道元の75-SBGZと12-SBGZのテキストを容易く利用できる。こうした特長のおかげで、研究者は75-SBGZと12-SBGZを決定版という形で研究することが可能となる。とはいえ、河村版だけでは不十分である。水野が指摘するように、60-SBGZと28-SBGZもまた注目に値するのである。「唯一の正法眼蔵」のかわりに、現代的な印刷版として多種多様な『正法眼蔵』がある方が望ましい。少なくとも、我々には75-SBGZと12-SBGZだけではなく、28-SBGZおよび60-SBGZの校訂版・修訂版が必要である。これらの諸版がなくては、研究者が簡単にテキストを比較または対照することができず、加えて道元が道元を書き直したその方法について十分に考察することはできない。最先端の文献学的分析方法に照らせば、これらのテキストの印刷版だけでは十分ではないだろう。正確な電子版—訂正のあるものとなないもの双方、句読点を附したものと附さないもの双方—も必要である。『正法眼蔵』の諸本全てを包括する正確な電子データの集成がなくては、道元の言語的特性について、コンピューターで意義ある分析を行うことは出来るはずもない。我々が著者としての道元を思い描くにあたって、これは大きな助力となるだろう。日本と世界にいる仲間の研究者に対して、これらの

目標が実現するよう協力をお願いし、本稿の結びとしたい。

【一次文献・略称】

- CBETA 中華電子佛典協會 (Chinese Buddhist Electronic Text Association)。「CBリーダー」ソフトウェア、および漢訳仏典のデジタル版である。
- DZZ 酒井得元・鏡島元隆・桜井秀雄監修『道元禪師全集』(全七巻)、春秋社、1988-1991年
- DZZ 1-2 『正法眼蔵』(Kana-SBGZ) 第1巻・第2巻、河村孝道編。
- DZZ 5.124-275. 『正法眼蔵』(Mana-SBGZ)、石井修道編。
- EST 大本山永平寺内永平正法眼蔵菟書大成刊行会『永平正法眼蔵菟書大成』(全25巻)、大修館書店、1974-1982年。
- EST-D 大本山永平寺内永平正法眼蔵菟書大成刊行会『道元禪師眞蹟關係資料集』(大本山永平寺内永平正法眼蔵菟書大成刊行会『永平正法眼蔵菟書大成 別巻』)、大修館書店、1980年。
- EST-S 大本山永平寺内永平正法眼蔵菟書大成刊行会『永平正法眼蔵菟書大成總目録』(大本山永平寺内永平正法眼蔵菟書大成刊行会『永平正法眼蔵菟書大成 別冊』)、大修館書店、1982年。
- EST-Z 大本山永平寺内永平正法眼蔵菟書大成刊行会『永平正法眼蔵菟書大成 續輯』(全10巻)、大修館書店、1992-2000年。
- SZ 曹洞宗全書刊行会『曹洞宗全書』(18巻、別巻6巻)、曹洞宗宗務庁、1970-1973年。
- T 高楠順次朗・渡邊海旭編『大正新脩大藏經』(全100巻)、大蔵出版、1924-1935年。
※第1～第85巻については、*Samgaṇikikṛtaṃ Taiśōtripitakam* (SAT大正新脩大藏經テキストデータベース <http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>) にてオンライン利用可能。第1～第55巻・第85巻についてはCBETAにてオンライン利用可能。

【二次文献 (和書)】

秋津秀彰、2017、『江戸時代における『正法眼蔵』編輯史の研究』、駒澤大学博士課程論文。

- 池上光洋、2015、「『真字正法眼藏』解題」（石井修道編『中世禪籍叢刊第二巻 道元集』、臨川書店）、615-618。
- 石井清純、1990、「乾坤院本「洗面」と洞雲寺本「洗面」について（1）」『駒澤大學佛教學部研究紀要』48、76-90。
- 石井清純、1991、「乾坤院本「洗面」と洞雲寺本「洗面」について（2）」『駒澤大學佛教學部研究紀要』49、88-106。
- 石井清純、1992、「乾坤院本「洗面」と洞雲寺本「洗面」について（3）」『駒澤大學佛教學部研究紀要』50、136-156。
- 石井清純、2003、「『正法眼藏』における「大悟」の定義について：真福寺本と乾坤院本「大悟」巻の比較から」『印度學佛教學研究』51、174-178。
- 石井修道、1973、「『宗門統要集』について（1）」『駒澤大學佛教學部論集』4、43-58。
- 石井修道、1984、「『義雲和尚語録』の引用典籍について：真字「正法眼藏」との関係を中心として」（熊谷忠興編『義雲禪師研究』、永平寺祖山傘松会）、69-107。（再録：石井修道、1991、『道元禪の成立史的研究』、大蔵出版、535-567）。
- 石井修道、1985、「『宗門統要集』と真字『正法眼藏』：真字『正法眼藏』の出典の全面的補正」『宗學研究』27、58-65。（再録：石井修道、1988、『中国禪宗史話：真字「正法眼藏」に学ぶ』、禪文化研究所、559-576）。
- 石井修道、1987、「真字『正法眼藏』の謎を追う」『中外日報』6月24・26・29日、7月1・3日号。（再録：石井修道、1988、『中国禪宗史話：真字「正法眼藏」に学ぶ』、禪文化研究所、577-608）。
- 石井修道、1987、『宋代禪宗史の研究』、大東出版社。
- 石井修道、1988、『中国禪宗史話：真字「正法眼藏」に学ぶ』、禪文化研究所。
- 石井修道、1989、「解題：正法眼藏」（酒井得元・鏡島元隆・桜井秀雄監修『道元禪師全集』第五巻、春秋社）、294-309。
- 石井修道、1991、『道元禪の成立史的研究』、大蔵出版。
- 石井修道、2015、「『道元集』総説」（石井修道編『中世禪籍叢刊第二巻 道元集』、臨川書店）、571-606。
- 石井修道、2015、「『嗣書』解題」（同上）、631-642。
- 石井修道、2016b、「仮名『正法眼藏』はいつ成立したか」『駒澤大學禪研究所年報』28、256-234（61-79）。
- 石井修道、2018、「仮名『正法眼藏』の成立過程と編集」（パリのフランス極東

学院での講義録)。

石井修道編、1984-1986、桜井秀雄監修『禪籍善本古注集成 2 宏智録』上巻・中巻・下巻、名著普及会。

石井修道編、1989、「正法眼藏」(酒井得元(1912-1996)・鏡島元隆(1912-2001)・桜井秀雄(1916-2000)監修、鈴木格禪・桜井秀雄・酒井得元・石井修道校訂・注釈『道元禪師全集』第5巻、春秋社)、124-275。

石井修道編、2015、『中世禪籍叢刊第二巻 道元集』、臨川書店。

石附勝龍、1980、「正法眼藏御再治における変容の性格」『宗學研究』22、83-88。

伊藤秀憲、1980、「『永平広録』説示年代考」『駒澤大學佛教學部論集』11、171-197。

伊藤秀憲、1981、「『正法眼藏』撰述示衆年代考」『駒澤大學佛教學部研究紀要』39、243-256。

伊藤秀憲、1989、「『正法眼藏』の編纂について」『宗學研究』31、91-97。

伊藤秀憲、2006、「『正法眼藏』はいかに編纂されたか」『駒澤短期大學佛教論集』12、1-21。

伊藤秀憲、2015、「『大悟』解題」(石井修道編『中世禪籍叢刊第二巻 道元集』、臨川書房)、622-630。

永平寺、1998、『道元禪師七五〇回大遠忌記念出版：秘密正法眼藏』(和装三冊一帙)、附「解題」(河村孝道)、大本山永平寺大遠忌局による複製版、大修館書店・衛藤即應校注、1939・1942・1943、『正法眼藏』三巻(岩波文庫)、岩波書店(1959・1989・2004に再刊)。

衛藤即應、1944、『宗祖としての道元禪師』、岩波書店。

衛藤即應、1959、『正法眼藏序説：辨道話義解』、岩波書店。

大内青巒(1845-1918)校、1885、『正法眼藏』、鴻盟社。

大内青巒(1845-1918)校、1896、『正法眼藏』、國母社。

大久保道舟(1896-1994)編、1930、『道元禪師全集：全』、春秋社。

大久保道舟(1896-1994)編纂、1935、『曹洞宗大年表』(再刊『曹洞宗全書年表』、曹洞宗宗務庁、1973)。

大久保道舟(1896-1994)、1944、『定本・道元禪師全集』、春秋社松柏館。

大久保道舟(1896-1994)、1953、『道元禪師傳の研究』、岩波書店。

大久保道舟(1896-1994)、1966、『道元禪師傳の研究(修訂増補)』、筑摩書房。

大久保道舟(1896-1994)編、1969-1970、『道元禪師全書』上巻・下巻、筑摩書房。

大久保道舟(1896-1994)編、1971、『古本校定 正法眼藏 全』、筑摩書房。

- 大久保道舟（1896-1994）編、1972、『曹洞宗古文書』上巻・下巻・拾遺、筑摩書房。
- 鏡島元隆（1912-2001）、1954、「眞字正法眼藏について」『印度學佛教學研究』2、440-442。
- 鏡島元隆（1912-2001）、1965、『道元禪師と引用經典・語録の研究』、木耳社。
- 鏡島元隆（1912-2001）、1977、「『永平広録』考」（再録『道元禪師とその周辺』、大東出版社、1985、247-265）。
- 鏡島元隆（1912-2001）、1983、『天童如浄禪師の研究』、春秋社。
- 鏡島元隆（1912-2001）、1985、「眞名「正法眼藏」より仮名「正法眼藏」へ」『道元禪師とその周辺』、春秋社、277-296。
- 鏡島元隆（1912-2001）、1986a、「道元禪師の引用燈史・語録一覧表」『駒澤大學佛教學部論集』17、23-69。
- 鏡島元隆（1912-2001）、1986b、「書評：河村孝道著『正法眼藏の成立史的研究』」『駒澤大學佛教學部論集』18、458-460。
- 鏡島元隆（1912-2001）、1987、「道元禪師の引用燈史・語録について（承前）：眞字『正法眼藏』を視點として」『駒澤大學佛教學部研究紀要』45、1-17。
- 鏡島元隆（1912-2001）、1988、「十二卷本『正法眼藏』について」『駒澤大學佛教學部論集』19、48-63。
- 鏡島元隆（1912-2001）、1989、「『正法眼藏八大人覺』奥書私見」『駒澤大學佛教學部論集』20、14-27（鏡島1994に再録）。
- 鏡島元隆（1912-2001）、1991、「十二卷本『正法眼藏』の位置づけ」（鏡島元隆・鈴木格禪編『十二卷本『正法眼藏』の諸問題』、大蔵出版）、3-30。
- 鏡島元隆（1912-2001）、1994、『道元禪師とその宗風』、春秋社。
- 鏡島元隆監修・曹洞宗宗学研究所編、1995、『道元引用語録の研究』、春秋社。
- 河村孝道、1980a、「正法眼藏」（鏡島元隆・玉城康四郎編『講座道元3 道元の著作』、春秋社）、2-73。
- 河村孝道、1980b、「『正法眼藏』成立の諸問題（六）：真福寺文庫所蔵『大悟』巻草稿本の紹介」『駒澤大學佛教學部研究紀要』38、13-49。
- 河村孝道、1986、『正法眼藏の成立史的研究』、春秋社。
- 河村孝道、1991、「眞字仮字『正法眼藏』成立・編輯・伝写の様相」（『影印本正法眼藏』別冊、教行社）。
- 河村孝道、1993、「解題」（酒井得元・鏡島元隆・桜井秀雄監修、鈴木格禪・河村孝道・小坂機融編、河村孝道校注『道元禪師全集』第2巻、春秋社）、pp.673-721。

河村孝道、1998、「解題『秘密正法眼藏』について」（大本山永平寺大遠忌局『道元禪師七五〇回大遠忌記念出版・秘密正法眼藏』（復刻）付録、大修館書店）、Pp.2-22、大本山永平寺大遠忌局による複製版、大修館書店。

河村孝道校訂・注釈、1991-1993、酒井得元・鏡島元隆・桜井秀雄監修『道元禪師全集 第1巻・第2巻 正法眼藏』、春秋社。

河村孝道・眞鍋俊照編、1991、正法眼藏影印本刊行会『影印本正法眼藏』、教行社（和装四十一冊、六帙。正法眼藏影印本刊行会による複製）。

1. 『假名正法眼藏：洞雲寺藏六拾卷本』（「洞雲寺藏仮字正法眼藏」）、二十冊
2. 『假名正法眼藏：永光寺藏拾貳卷本』（「永光寺藏仮字正法眼藏」）、三冊
3. 『假名本正法眼藏：乾坤院藏七拾五卷本』（「乾坤院藏仮字正法眼藏」）、十五冊
4. 『眞字正法眼藏：永昌院藏參卷本』（「永昌院藏眞字正法眼藏」）、一冊
5. 『眞字正法眼藏：眞法寺舊藏參卷本』（「眞法寺旧藏眞字正法眼藏」）、一冊
6. 『眞字正法眼藏：金澤文庫藏中卷本』（「金沢文庫藏眞字正法眼藏」）、一冊

川瀬一馬（1906-1999）、1959、「桂庵和尚家法倭點について」『青山學院女子短期大學紀要』13、35-72。

岸澤惟安（1865-1955）、1943、「校註正法眼藏ののちに書す」（衛藤即應校註『正法眼藏』第3巻（岩波文庫）、岩波書店）、pp.323-329。

熊谷忠興、1982、「古規復古と玄透即中禪師」（桜井秀雄編、『永平寺史』第2巻、大本山永平寺）、1017-1230。

熊谷忠興、1982、「『正法眼藏』の開版」（桜井秀雄編、『永平寺史』第2巻、大本山永平寺）、1028-1118。

桜井秀雄（1916-2000）編、1982、『永平寺史』上巻・下巻、大本山永平寺。

佐野文翁、1982、『正法眼藏書写年表』、蓬萊屋印刷所。

佐野文翁、1983、『玄透開版正法眼藏関係年表』、蓬萊屋印刷所。

『正法眼藏』、祖道穩達（1813没）その他編、道元撰。永平寺本山版95巻。書名『永平正法眼藏』。別名『彫刻永平正法眼藏』、『本山版』、『祖山版』。

A. 木版版

（1）1815、木版簡略版。書名、『永平正法眼藏』。21冊。20冊（木版印

刷の90巻および白紙の5巻よりなる)に付録1冊(序、編集史、年表および目次よりなる)。4帙。真仮字(カタカナ)遣表記。巻順は不正確。
(2) 1906、木版完全版。書名、『永平正法眼藏』。21冊。20冊(木版印刷の95巻よりなる)、付録1冊。4帙。
(3) 1974-1975、木版完全版。書名、『開板永平正法眼藏』、復刻限定版。大本山永平寺、読売新聞社。

B. 活版印刷版 Typeset reprinted editions

- (1) 1885、一卷、大内青巒(1845-1918)校。1815年の木版縮刷版の活版印刷版、白紙の5巻分についても詳細不詳の文書から活字化。書名、『正法眼藏』。鴻盟社。真仮字(カタカナ)遣表記。巻順は不正確。
(2) 1896、一卷、大内青巒(1845-1918)校。1885年版の再刊。書名、『正法眼藏』。國母社。
(3) 1926、一卷、永平寺による1906年の木版完全版の再刊。書名、『本山版縮刷正法眼藏全』、鴻盟社。1952年に再刊。平仮名遣表記。巻順は不正確。
(4) 1931、T no. 2582、Vol. 82, pp. 7-309。1906年木版完全版の再刊。『正法眼藏』、岸澤惟安(1865-1955)編、校注後記(「校註正法眼藏ののちに書す」)あり。真仮字(カタカナ)遣表記。巻順は訂正済み。
(5) 1939・1942・1943、三巻、1906年の木版完全版の再刊。衛藤即應(1888-1958)校註、「渉典」・「正法眼藏字彙」・「索引」つき。補巻一卷、異本四巻を「正法眼藏別輯」として輯録。書名、『正法眼藏』、岩波文庫、岩波書店。平仮名遣表記。巻順は訂正済み。1959・1989・2004年に再版。
杉尾玄有、1977、「正法眼藏『現成公案』の閑却とその「拾勒」」『印度學佛教學研究』26、211-214。
杉尾玄有、1978、「道元における真如の問題」『研究論叢：人文科学・社会科学(山口大学教育学部)』28、15-30。
角田泰隆、1995(1993)、「仮字『正法眼藏』と真字『正法眼藏』」『駒澤大學佛教學部論集』24、243-260。のち、増補版が鏡島1995(『道元引用語録の研究』、15-44)に収録。
角田泰隆、2001、「『正法眼藏』再治の諸相」『駒澤短期大學紀要』29、315-329。
寺田透(1915-1995)・水野彌穗子(1921-2010)校注、1970-1972、『日本思想大系12・13 道元』上巻・下巻、岩波書店(再刊『原典日本仏教の思想7・8 道元』、岩波書店、1990-1991)。

中世古祥道、1979、『道元禪師伝研究』、国書刊行会。

永久岳水（1890-1981）、1965、「正法眼蔵異本存在の原因」『駒澤大學佛教學部紀要』23、59-74。

永久岳水（1890-1981）、1972、『正法眼蔵著述史の研究』、仏教書林中山書房。

野村瑞峯、1965、「金沢文庫本正法眼蔵：第二十二則について」『金沢文庫研究』117、14-31。

広瀬良弘、1982、「永平寺の衰運と復興運動」（桜井秀雄編『永平寺史』第一巻、大本山永平寺）、379-541。

広瀬良弘、1982、「幕府の統制と永平寺」（同上）、543-714。

広瀬良弘、1982、「晃全禪師の『正法眼蔵』編集」（同上）、668-685。

広瀬良弘、1982、「『正法眼蔵』の謄写と伝播」（同上）、501-525。

広瀬良弘、1988、『禅宗地方展開史の研究』、吉川弘文館。

水野彌穂子（1921-2010）、1965、「『正法眼蔵』の諸本その他について」（西尾實ほか編『日本古典文學大系81 正法眼蔵・正法眼蔵隨聞記』、岩波書店）、34-56。

水野彌穂子（1921-2010）、1970、「『正法眼蔵』の本文作成と渉典について」（寺田透・水野彌穂子校注『日本思想大系12 道元 上』、岩波書店）、pp.576-589。

水野彌穂子（1921-2010）、校注、1970、1972。「『辨道話』、『正法眼蔵』、『十二卷正法眼蔵』」（寺田透（1915-1995）・水野彌穂子校注『日本思想大系12・13 道元 上・下』、岩波書店）。

水野彌穂子（1921-2010）校注、1990、『正法眼蔵』4巻（岩波文庫）、岩波書店（再刊 1993）。

横關了胤（1883-1973）、1938、『江戸時代洞門政要』、佛教社。

吉田道興、1982、「叡山本『正法眼蔵』の編集」（桜井秀雄編『永平寺史』下巻、大本山永平寺）、pp. 909-915。

若山悠光、2015、「別本『心不可得』の課題」『駒澤大學禪研究所年報』27、197-218。

若山悠光、2016b、「別本『仏向上事』の性格」『駒澤大學大学院佛教學研究會年報』49、35-80。

【二次文献（洋書）】

Bédier, Joseph. 1928 (1933). "La tradition manuscrite du 'Lai de l'Ombre':

- Réflexions sur l'art d'éditer les anciens textes." *Romania* 54: 161-196 (part 1) ; 321-356 (part 2).
- Bielefeldt, Carl. 1988. *Dōgen's Manuals of Zen Meditation*. Berkeley: University of California Press.
- Bodiford, William M. 1991. "Dharma Transmission in Sōtō Zen: Manzan Dōhaku's Reform Movement." *Monumenta Nipponica* 46: 423-451.
- Bodiford, William M. 1993. *Sōtō Zen in Medieval Japan*. Studies in East Asian Buddhism, no. 8. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Bodiford, William M. 2006. "Remembering Dōgen: Eiheiji and Dōgen Hagiography." Reprinted in *Dōgen: Textual and Historical Studies*. Edited by Steven Heine. Pp. 207-222, 267-273. New York: Oxford University Press, 2012.
- Bodiford, William M. 2007. "Dharma Transmission in Theory and Practice." In *Zen Ritual*. Edited by Steven Heine and Dale S. Wright. Pp. 261-282. New York: Oxford University Press.
- Bodiford, William M. 2012a. "The Rhetoric of Chinese Language in Japanese Zen." In *Zen Buddhist Rhetoric in China, Korea, and Japan*. Edited by Christoph Anderl. Pp. 285-314. Conceptual History and Chinese Linguistics, volume 3. Leiden: Brill.
- Bodiford, William M. 2012b. "Textual Geneologies of Dogen." In *Dōgen: Textual and Historical Studies*. Edited by Steven Heine. Pp. 15-41, 237. New York: Oxford University Press.
- Boltz, William G. 1995. "Textual Criticism More Sinico." *Early China* 20: 393-405.
- Bowers, Fredson (1905-1991). 1955. "McKerrow's Editorial Principles for Shakespeare Reconsidered." *Shakespeare Quarterly* 6: 309-324.
- Bowers, Fredson (1905-1991). 1978. "Greg's 'Rationale of Copy-Text' Revisited." *Studies in Bibliography* 31: 90-161.
- Cherniack, Susan. 1994. "Book Culture and Textual Transmission in Sung China." *Harvard Journal of Asiatic Studies* 54: 5-125.
- Etō Sokuō 衛藤即應 (1888-1958). 2001. *Dōgen Zenji as Founding Patriarch (of the Japanese Sōtō Zen School)*. Translated by Ichimura Shōhei. [Translation of Etō 1944.] Tsurumi, Japan: Daihonzan Sōjiji.
- Girard, Frédéric. 2007. *The Stanza of the Bell in the Wind: Zen and Nenbutsu*

- in the Early Kamakura Period*. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.
- Greg, W. W. [Walter Wilson] (1875-1959). 1951. "The Rationale of Copy-Text." *Studies in Bibliography* 3: 19-36.
- Heine, Steven. 1994. "'Critical Buddhism' (Hihan Bukkyō) and the Debate Concerning the 75-fascicle and 12-fascicle Shōbōgenzō Texts." *Japanese Journal of Religious Studies* 21: 37-72.
- Heine, Steven. 1994. *Dōgen and the Kōan Tradition: A Tale of Two Shōbōgenzō Texts*. Albany, New York: State University of New York Press.
- Heine, Steven. 2006. *Did Dōgen Go to China? What He Wrote and When He Wrote It*. New York: Oxford University Press.
- Heine, Steven. 2014. "Ishii Shūdō's Contributions to Dōgen Studies." *Japanese Journal of Religious Studies* 41: 387-404.
- Hobbs, Edward. 1979. "An Introduction to Methods of Textual Criticism." In *The Critical Study of Sacred Texts*. Edited by Wendy Doniger O'Flaherty. Pp. 1-27. Berkeley: Berkeley Religious Studies Series.
- Housman, A. E. [Alfred Edward], (1859-1936). 1921. "The Application of Thought to Textual Criticism." *Proceedings of the Classical Association* 18: 68-84. Reprinted in *The Classical Papers of A. E. Housman*. Edited by J. Diggle and F. R. D. Goodyear. 3.1058-1069. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ishii Shūdō 石井修道. 2000. "Kung-an Ch'an and the 'Tsung-men t'ung-yao chi.'" Translated by Albert Welter. In *The Kōan: Texts and Contexts in Zen Buddhism*. Edited by Steven Heine and Dale S. Wright. Pp. 110-136. New York: Oxford University Press.
- Ishii Shūdō 石井修道. 2016a. "On the Origins of Kana 'Shōbōgenzō.'" Translated by Kristyna Cislerova. *Komazawa daigaku zen kenkyūjo nenpō 駒澤大學禪研究所年報* 28: 280-253 (33-60).
- Ishikawa Rikizan 石川力山 (1943-1997). 2002. "Colloquial Transcriptions as Sources for Understanding Zen in Japan." Translated by William M. Bodiford. *The Eastern Buddhist*, new series, 36: 120-142.
- McKerrow, Ronald B. (1872-1940). 1939. *Prolegomena for the Oxford Shakespeare: A Study in Editorial Method*. Oxford: The Clarendon Press.

Whitehead, Frederick and C. E. Pickford. 1973. "The Introduction to 'Lai de l'ombre': Sixty Years Later." *Romania* 94: 145-156.

Wakayama Yuko 若山悠光. 2016a. "The Formation of Kana Shōbōgenzō: Tracing Back Beppon (Draft Edition) Shifukutoku." *Komazawa daigaku zen kenkyūjo nenpō* 駒澤大學禪研究所年報 28: 312-281 (1-32).

【注】

- 1 永久岳水は、道元による道元の書き直しによって発生した問題について、早くも1965年（1972、203以下）に提示したが、近年に至るまで諸資料の利用が出来なかったことから、ごく一部の研究者を除いて、永久の指摘に続くことができなかったのである。例えば、以下を参照のこと。杉尾玄有（1978）、石附勝龍（1980）、河村孝道（1980b、1986、551-667）、石井清純（1990、1991、1992）、角田泰隆（2001）、石井修道（2015）、若山悠光（2015、2016a、2016b）。
- 2 近年の概要については、特に秋津秀彰（2017）、石井修道（2016a、2016b、2018）を参照のこと。包括的説明については、河村孝道（1986）を参照のこと。概要については、Bodiford（2012b）を参照のこと。
- 3 この最初の二例として「洗面」および「深信因果」の奥書を用いることについては、伊藤秀憲（2015、622-624）から着想を得た。
- 4 60-SBGZと75-SBGZにおける「洗面」の差違に関する詳細な分析については、石井清純（1990、1991、1992）を参照のこと。
- 5 28-SBGZでは、各冊それぞれに目次が附せられており、第一から順番に巻数が列挙されている。冊子本文のなかでは、いくつかの巻題には固有の巻数が記される。28-SBGZの第二冊の第九巻は「正法眼蔵 第十二 八大人覺」と題される（EST 947b）。
- 6 道元によって書かれた筆記体（草字と草仮名）については、現在の平仮名や、今日崩字や変体仮名として知られる近世期の筆記体と同等に考えてはならない。現在の平仮名も近世期の崩字も、伝統的に小学校など初等教育において教えられたかなり標準化された型から成っており、読み書きの出来る者であれば社会階級に関わらず誰でも簡単に読むことのできるものであった。道元が書いた筆記体は多種多様な文字が用いられており、こうした文字に精通しているということは、その書き手が京都の公家階級の子弟である証しである（水野 1973, 6）。

- 7 この方針は水野版の1990年の岩波文庫の再版では放棄された。岩波文庫版では、「仮名遣を歴史的仮名遣に統一し、句読点、漢文訓読に多少の修正を加えた」(1.3)とある。道元の仮名遣いを研究したいと希望する研究者は、過去の水野版に依拠せねばならない。
- 8 鏡島(1986b, 459)と河村(1986, 16 n 2)を参照。河村はさらに百以上の『正法眼蔵』の謄写がおそらく日本に現存するものの、それらは個人や団体が所蔵していて調査のために利用することは出来ないと推測している。
- 9 1970年・水野版では、補巻として収録されるのは一巻のみである(本山版に含まれたが、75-SBGZや12-SBGZには見当たらない巻)が、1990年・岩波文庫水野版には五巻分(計六巻)が収録される。どちらも、諸巻の別巻については収録していない。
- 10 筆者は類似性を指摘しているという点を力説しておきたい。様々な時代や文化的文脈、さらには文献の種別を背景とする文献記録の独自性には、ある意味、同一の基準で測れない様々な問題、出典、そして編集方法が伴うものである。
- 11 大きな影響を与えた代表例を年代順に示しておく。McKerrow 1939, 6-7。Greg 1941, Greg 1951。Bowers 1955。Bowers 1978など。
- 12 『漢語大詞典』(1987), 2.796。
- 13 例えば、『大正新脩大藏經』の中国撰述部では、「勒銘」(18例)と「勒碑」(13例)が確認できる。
- 14 例えば、同上の大正蔵には「銘勒」(8例)が確認される。
- 15 大正蔵には61例以上を確認した。以下を参照のこと。T no. 220, 5.1a, 7.991c, 1055b, 1065c。T no. 780, 17.717b。T no. 982, 19.415a。T no. 1585, 31.59c。T no. 1604, 31.590a。T no. 1744, 37.1c。T no. 1791, 39.434b, 524c。T no. 1799, 39.825c。T no. 1804, 40.1b。T no. 1809, 40.511b-c。T no. 1810, 40.538b24。T no. 2051, 50.198b。T no. 2053, 50.254a。T no. 2054, 50.282a。T no. 2060, 50.426c, 471a, 491c, 499 a, 528a, 620c, 690a。T no. 2061, 50.720c, 738c3, 783c17-18, 801c6。T no. 2068, 51.66a。T no. 2080, 51.775c-776a。T no. 2087, 51.868b。T no. 2089, 51.981b。T no. 2099, 51.1101b。T no. 2103, 52.244c, 257a。T no. 2104, 52.397 a。T no. 2115, 52.703c。T no. 2119, 52.818b。T no. 2122, 53.496c。T no. 2189, 56.144a。T no. 2196, 56.492b。T no. 2197, 56.717a。T no. 2199, 56.825b。T no. 2244, 61.757a。T no. 2290, 69.823c。T no. 2347, 74.1b。T no. 2366, 74.263b。T no. 2453, 77.829c。T no.

2704, 84.467a。T no.2826, 85.1236a。『阿婆縛抄』(大正藏・図像部、8.504b, 504c) および『門葉記』(同前、11.757a) においては「勒卷数」と略されて使用される点に特に注意。

- 16 DZZ 1の凡例(頁番号なし)には次のように記される。「底本の本文校異は、原則として底本に関わる最小限の範囲にとどめ…。」

Appendix 1. Source Texts Used in Modern Printed Editions

付録資料 1. 現代の活版印刷版の底本

A. The Seventy-Five Chapter Shōbōgenzō

(七十五帖正法眼藏)

Contents	1969 Ōkubo	1970 Mizuno	1991 Kawamura
目次	大久保道舟版	水野彌穗子版	河村孝道版
1 Genjō kōan 現成公案	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	75-SBGZ Ryūmonji (龍門寺)
2 Maka hannya haramitsu 摩訶般若波羅蜜	"	"	"
3 Busshō 佛性	Eiheiji ms. Ejō authograph dated 1258 永平寺本 懷奘真筆書 写本 (1258)	Eiheiji ms. Ejō authograph dated 1258 永平寺本 懷奘真筆書 写本 (1258)	"
4 Shinjin gakudō 身心學道	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
5 Sokushin zebutsu 即心是佛	"	"	"
6 Gyōbutsu iigi 行佛威儀	"	"	"
7 Ikka myōju 一顆明珠	"	"	"
8 Shin fukatoku 心不可得	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	"
9 Kobutsushin 古佛心	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
10 Daigo 大悟	"	"	"
11 Zazen gi 坐禪儀	"	"	"
12 Zazen shin 坐禪箴	Kōfukuji ms. Zazenshin mata yōki 広福寺本 坐禪箴又要機	Kōfukuji ms. Zazenshin mata yōki 広福寺本 坐禪箴又要機 & 75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	"
13 Kaiin zanmai 海印三昧	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
14 Kūge 空華	Eiheiji ms. dated 1318 永平寺本 (1318)	Eiheiji ms. dated 1318 永平寺本 (1318)	"

15 Kōmyō 光明	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
16a Gyōji jō 行持 上	"	"	"
16b Gyōji ge 行持 下	Kōfukuji ms. Busso gyōji 広福寺本 佛祖行事	Kōfukuji ms. Busso gyōji 広福寺本 佛祖行事	"
17 Inmo 恁麼	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
18 Kannon 觀音	"	"	"
19 Kokyō 古鏡	"	"	"
20 Uji 有時	"	"	"
21 Juki 授記	"	"	"
22 Zenki 全機	"	"	"
23 Tsuki 都機	"	"	"
24 Gabyō 畫餅	"	"	"
25 Keisei sanshoku 谿聲山色	Eiheiji ms. dated 1366 永平寺本 (1366)	Eiheiji ms. dated 1366 永平寺本 (1366)	"
26 Bukkōjōji 佛向上事	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
27 Muchū setsumu 夢中說夢	"	"	"
28 Raihai tokuzui 禮拜得髓	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院) & 28-SBGZ Himitsu (秘密)	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院) & 28-SBGZ Himitsu (秘密)	75-SBGZ Ryūmonji (龍門寺) & 28-SBGZ Himitsu (秘密)
29 Sansuikyō 山水經	Zenkyūin ms. Dōgen (or Gikai?) authograph 全久院本 道元 (又は義介?) 真筆諸写本	Zenkyūin ms. Dōgen (or Gikai?) authograph 全久院本 道元 (又は義介?) 真筆諸写本	75-SBGZ Ryūmonji (龍門寺)
30 Kankin 看經	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
31 Shoaku makusa 諸惡莫作	"	"	"
32 Den e 傳衣	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	"
33 Dōtoku 道得	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
34 Bukkyō 佛教 (Teachings)	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	"
35 Jinzū 神通	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"

36 Arakan 阿羅漢	"	"	"
37 Shunjū 春秋	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	"
38 Kattō 葛藤	"	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
39 Shisho 嗣書	Satomi ms. Dōgen holograph 里見本 道元真筆本	Satomi ms. Dōgen holograph 里見本 道元真筆本	"
40 Hakujushi 柏樹子	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
41 Sangai yuishin 三界唯心	"	"	"
42 Sesshin sesshō 説心説性	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	"
43 Shohō jissō 諸法實相	"	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
44 Butsudō 佛道	"	"	"
45 Mitsugo 密語	"	"	"
46 Mujō seppō 無情説法	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"	"
47 Bukkyō 佛經	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	"
48 Hosshō 法性	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
49 Darani 陀羅尼	"	"	"
50 Senmen 洗面	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	"
51 Menju 面授	"	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
52 Busso 佛祖	"	"	"
53 Baika 梅華	"	"	"
54 Senjō 洗淨	"	"	"
55 Jippō 十方	Zenkyūin ms. Ejō authograph dated 1245 全久院本 懷奘真書 写本 (1245)	Zenkyūin ms. Ejō authograph dated 1245 全久院本 懷奘真書 写本 (1245)	"
56 Kenbutsu 見佛	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
57 Henzan 遍參	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	"
58 Ganzei 眼晴	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"

59 Kajō 家常	"	"	"
60 Sanjūshichibon bodai bupō 三十七品菩提分法	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	"
61 Ryūgin 龍吟	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
62 Soshi seirai i 祖師西來意	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺) & Eihei ms. Dōgen (or Gikai?) authograph 永平寺本 道元 (又は義介?) 真筆書写本	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺) & Eihei ms. Dōgen (or Gikai?) authograph 永平寺本 道元 (又は義介?) 真筆書写本	"
63 Hotsu mujō shin 發無上心	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
64 Udon ge 優曇華	"	"	"
65 Nyorai zenshin 如來全身	"	"	"
66 Zanmai ō zanmai 三昧王三昧	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	"
67 Ten hōrin 轉法輪	"	"	"
68 Dai shugyō 大修行	"	"	"
69 Jishō zanmai 自證三昧	"	"	"
70 Kokū 虚空	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
71 Hou 鉢盂	"	"	"
72 Ango 安居	"	"	"
73 Tajin tsū 他心通	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院)	"
74 Ō saku sendaba 王索仙陀婆	"	"	"
75 Shukke 出家	"	"	"

Appendix 2. Source Texts Used in Modern Printed Editions

付録資料 2. 現代の活版印刷版の底本

B. The Yōkōji Twelve Chapter Shōbōgenzō

(永光寺所蔵 十二卷 正法眼藏)

Contents	1969 Ōkubo	1970 Mizuno	1991 Kawamura
目次	大久保道舟版	水野彌穗子版	河村孝道版
1 Shukke kudoku 出家功德	12-SBGZ Yōkōji (永光寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	12-SBGZ Yōkōji (永光寺)

2 Jukai 受戒	"	28-SBGZ Himitsu (秘蜜)	"
3 Kesa kudoku 袈裟功德	"	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
4 Hotsu bodai shin 發菩提心	"	"	"
5 Kuyō shobutsu 供養諸佛	"	"	"
6 Kie Buppōsō Bō 歸依佛法僧寶	"	"	"
7 Jinshin inga 深信因果	"	28-SBGZ Himitsu (秘蜜)	"
8 Sanji gō 三時業	"	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	"
9 Shiba 四馬	"	"	"
10 Shizen biku 四禪比丘	"	12-SBGZ Yōkōji (永光寺)	"
11 Ippyakuhachi hōmyō mon 一百八法明門	"	"	"
12 Hachi dainin gaku 八大人覺	"	28-SBGZ Himitsu (秘蜜)	"

Appendix 3. Source Texts Used in Modern Printed Editions

付録資料 3. 現代の活版印刷版の底本

C. Chapters included in the Honzan edition but not part of either the 75-SBGZ or 12-SBGZ

(本山版に収録されるが75-SBGZ (七十五巻本『正法眼蔵』)・12-SBGZ (十二巻本『正法眼蔵』)に収録されない諸巻)

Contents	1969 Ōkubo	1990 Mizuno	1991 Kawamura
目次	大久保道舟版	水野彌穗子版	河村孝道版
Bendōwa 辦道話	xylograph dated 1788 玄透開板本 (1788)	xylograph dated 1788 玄透開板本 (1788)	xylograph dated 1788 玄透開板本 (1788)
Bodaisatta shishōhō 菩提薩埵四攝法	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	* 60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)
Butsudō 佛道 (Dōshin 道心)	28-SBGZ Himitsu (秘蜜)	* 28-SBGZ Himitsu (秘蜜)	28-SBGZ Himitsu (秘蜜)
Hokke ten hokke 法華轉法華	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	* 60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)
Ji kuin mon 示庫院文	95-SBGZ Honzan ed. (本山版)		95-SBGZ Honzan ed. (本山版)

Jūundō shiki 重雲堂式	Kōfukuji ms. Dōgen holograph dated 1239 広福寺本 道元真筆本 (1239)		Kōfukuji ms. Dōgen holograph dated 1239 広福寺本 道元真筆本 (1239)
Shin fukatoku 心不可得 (Go Shin fukakaku)	28-SBGZ Himitsu (秘密)		28-SBGZ Himitsu (秘密)
Shōji 生死	"	* 28-SBGZ Himitsu (秘密)	"
Yuibutsu yobutsu 唯佛與佛	"	* "	"

* 注 これらの諸巻は岩波文庫版の再刊には含まれるが、底本である1970年の水野版には含まれない。

Appendix 4. Source Texts Used in Modern Printed Editions

付録資料 4. 現代の活版印刷版の底本

D. Rough drafts (*sōan* 草案, *chūan* 中案) of Shōbōgenzō chapters

(『正法眼蔵』諸巻の草稿(草案・中案))

Contents	1969 Ōkubo	1970 Mizuno	1991 Kawamura
目次	大久保道舟版	水野彌穂子版	河村孝道版
Bendōwa 辦道話	Shōbōji ms. dated 1515 正法寺本 (1515)		Shōbōji ms. dated 1515 正法寺本 (1515)
Bukkōjōji 佛向上事	28-SBGZ Himitsu (秘密)		28-SBGZ Himitsu (秘密)
Daigo 大悟			Senpukuji ms. 真福寺本
Henzan 遍參			60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)
Sanji gō 三時業	60-SBGZ Tōunji (洞雲寺)		"
Senmen 洗面	"		"
Shisho 嗣書			Kōjakuji ms. 広積寺本

Abbreviations 略号

12-SBGZ Yōkōji (永光寺) …石川県永光寺所蔵本 正法眼蔵 12巻本

28-SBGZ Himitsu (秘密) …福井県永平寺所蔵本 秘密正法眼蔵 28巻本

60-SBGZ Tōunji (洞雲寺) …広島県洞雲寺所蔵本 正法眼蔵 60巻本

75-SBGZ Kenkon'in (乾坤院) …愛知県乾坤院所蔵本 正法眼蔵 75巻本

75-SBGZ Ryūmonji (龍門寺) …石川県龍門寺所蔵本 正法眼蔵 75巻本

95-SBGZ Honzan edition (本山版) …本山版 正法眼蔵 95巻本

Bendōwa 辦道話 Shōbōji ms. dated 1515、辦道話 正法寺本 (1515)

…岩手県正法寺蔵『正法眼蔵雜文』所収本

Bendōwa 辦道話 xylograph dated 1788、辦道話 玄透開版本 (1788)

…玄透開版本 天明八年刊

Busshō 佛性 Eiheiji ms. Ejō authograph dated 1258、佛性 永平寺本 懷奘真筆書写本 (1258)

…福井県永平寺所蔵本 懷奘真筆書写本

Daigo 大悟 Senpukuji ms.、大悟 真福寺本…愛知県真福寺所蔵本

Gyōji ge 行持 下 Kōfukuji ms.、行持 下 広福寺本

…熊本県広福寺所蔵本

Kūge 空華 Eiheiji ms.dated 1318、空華 永平寺本 (1318)

…福井県永平寺所蔵本

Jippō 十方 Zenkyūin ms. Ejō authograph dated 1245、十方 全久院本 懷奘真筆書写本 (1245)

…愛知県全久院所蔵本 懷奘真筆書写本

Jūundō shiki 重雲堂式 Kōfukuji ms. Dōgen holograph dated 1239、重雲堂式 広福寺本 道元真筆本 (1239)

…熊本県広福寺所蔵本 道元真筆本

Sansuikyō 山水經 Zenkyūin ms.、山水經 全久院本

…愛知県全久院所蔵本

Shisho 嗣書 Satomi ms. Dōgen holograph、嗣書 里見本 道元真筆本

…里見忠三郎氏旧蔵本 道元真筆本

Shisho 嗣書 Kōjakuji ms.、嗣書 香積寺本

…広島県香積寺所蔵本

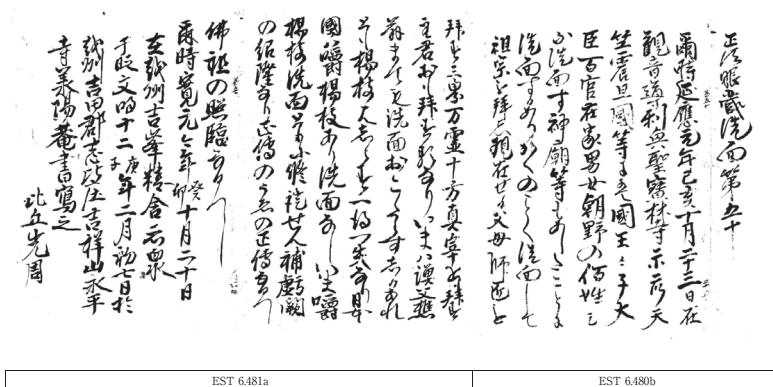
Soshi seirai i 祖師西來意 Eiheiji ms.、祖師西來意 永平寺本

…福井県永平寺所蔵本

Zazenshin mata yōki 坐禪箴 又 要機 Kōfukuji ms.、坐禪箴 又 要機 広福寺本

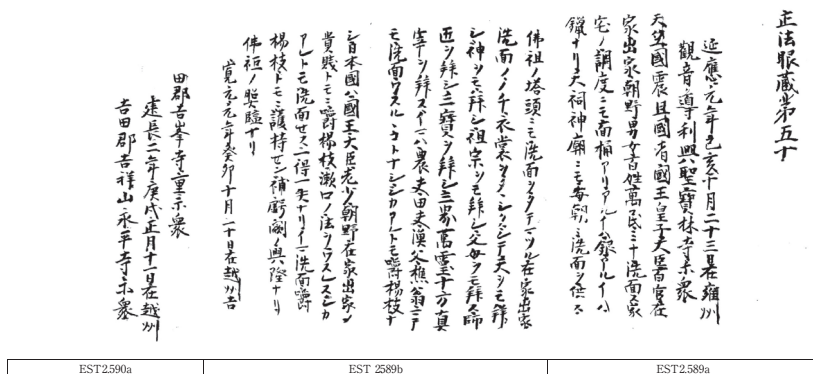
…熊本県広福寺所蔵本

Example 1. Washing the Face, Postscript in 60-SBGZ
 例文 1. 奥書：正法眼藏洗面第五十 洞雲寺所藏本
 (EST 6.480b-481a; cf. DZZ 2.590-591)



EST 6.481a	EST 6.480b
------------	------------

Example 2. Washing the Face, Rewritten Postscript in 75-SBGZ (Ryūmonji)
 例文 2. 書直された奥書 正法眼藏洗面第五十 龍門寺所藏本 75巻本
 (EST 2.589-590; cf. DZZ 2.53)



EST 2.590a	EST 2.589b	EST 2.589a
------------	------------	------------

Example 3. Deep Faith in Cause and Effect Colophon by Ejō in 28-SBGZ

例文 3. 懷葬ノ識語：正法眼藏 深信因果 平寺所藏本 秘蜜 28卷本 初ノ五
(EST 1.888b; cf. DZZ 2.394)

正法眼藏深信因果
被御奉與書云 建長七年九月
書云（本及中書）清定有可辨治事也雖然書空
作書

Example 4. Colophon to Hachi Dainin Gaku in 12-SBGZ

例文 4. 識語：正法眼藏八大人覺第十二 永光寺所藏本 12卷本
(EST 1.874a; cf. DZZ 2.458 headnote)

正法眼藏八大人覺第十二
此本藏書
建長七年三月二日書
今藏第七板建長上日抄本宮場合系錄圖下
平時文三年五月八日能州僧見保林聖所定書
以心定結語
生口一見佛圖出家得道供養主空內度衆生所寫正定
此本藏書
永光寺所藏本

Example 5. Colophon to Hachi Dainin Gaku in the Secret 28-SBGZ

例文 5. 識語：正法眼藏八大人覺 平寺所藏本 秘蜜 28卷本 中ノ九
(EST 1.949a; cf. DZZ 2.457-458))

正法眼藏 八大人覺
本云建長五年正月六日書了永平寺如今天建長
七年元解制之前日令義滿書識言字畢同一教之
在孝先師先後師中之師早也仰以前所撰級名
正法眼藏言言書改手新早是都盧盡伯是
可換之也
既始早之師此是雷才十二比之後師病斷之重
增仍師早來等定序止也所以此師言是寺先師
寂後ノ教初也我等不爭不拜見一百卷之師早
先所恨也若奉意要先師上人必當此十二卷
而可護持之此教尊最後之教初且先師先後
之遺教也 懷快記之

Example 6. Postscript and Colophon to Buddha Nature in 75-SBGZ (Ryūmonji)

例文 6. 奥書ト識語：正法眼藏佛性第三 龍門寺所藏本 75卷本
(EST 2.44a; cf. DZZ 1.44, 496)

正法眼藏佛性第三
南時仁治二年辛丑十月十四日在龍門觀音
道利與聖寶林寺示衆
文下
未二月廿四日書當
拉了